Onishi, Masao
Onseigaku Oyo onseigaku

大西 雅雄

音声学
応用音声学

國語科學講座

—II—

音聲學

# 應用音聲學

大西雅雄

株式會社

明治書院

國語科學講座

— II —

音聲學

# 應用音聲學

大西雅雄

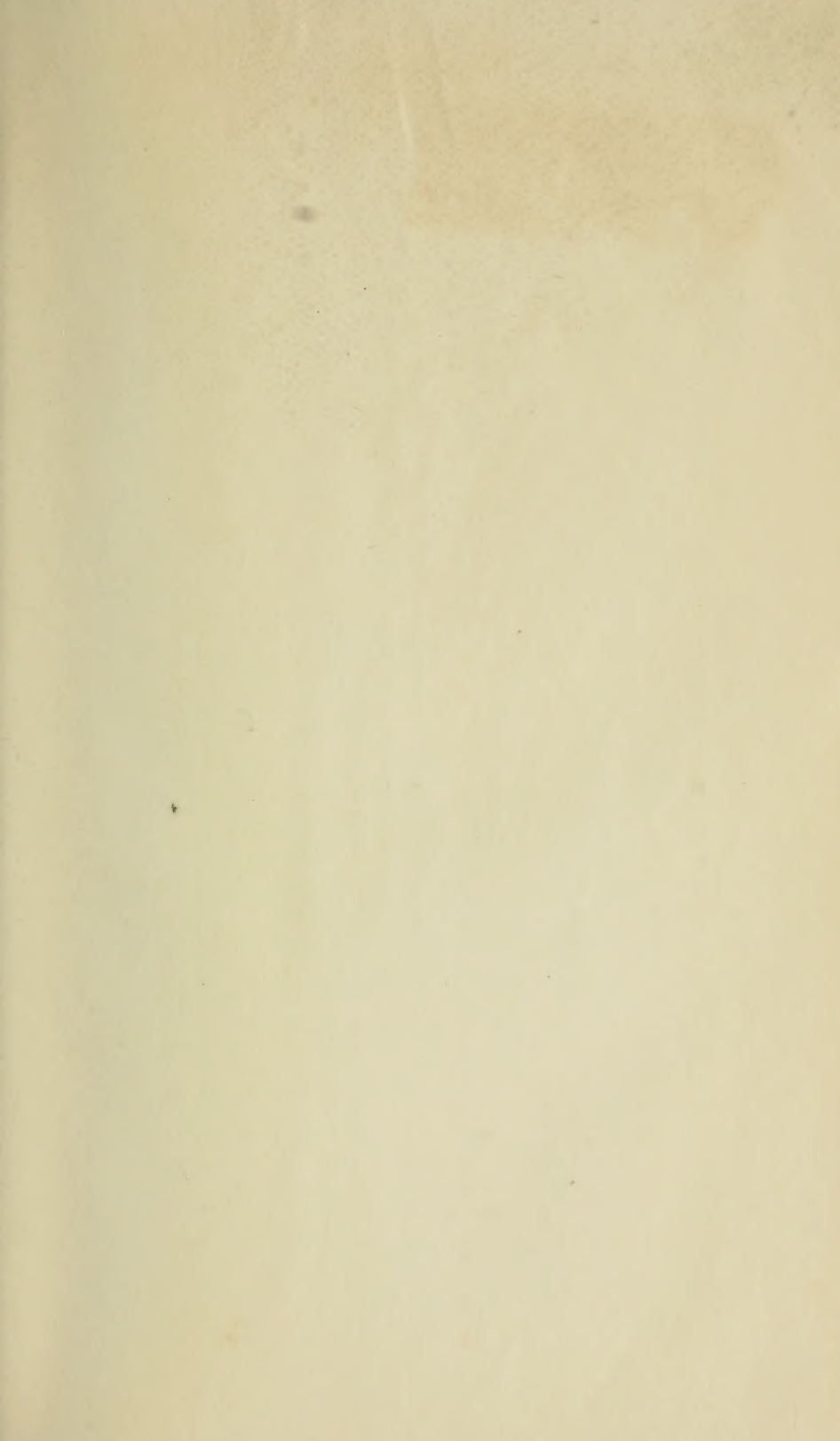
株式會社

明治書院

# 目次

# 應用音聲學

大西雅雄

## 第一章　序説

「應用音聲學」は一名[1]「教育音聲學」又は「通俗音聲學」である。本講では特に、「國語音聲學」を國語研究者の、又は教授者の、實用に供する方面を取扱ふ學問と限つてよからう。その目的とするところは、「ことば」の音聲方面を科學的に觀直す事であり、その「教授法」を合理的に能率化する事である。この研究範圍は極めて廣いが、抽象的に言へば、「國語音」の正常を明かにして異常を知り、普通態を認めて特殊態を矯め、又不振的なのを磨いて効果的に進める、などのあらゆる場合である。

元來、この學問は各論に入つて各部門を細述してこそ專門家の需めに應じ得べきものである。けれどもそれは、この限られたる紙面に於ては不可能な事であり、又一般の國語研究家には不要の事でもある。手元には多少の特殊材料もあるが、それらは皆割愛して、どこまでも一般の國語教育に向く概説に盛り上げて、實際的な一つの體系とする事にする。

先づ國語の標準音に含んでゐる語音（Phone）から點檢して行かう。短母音は次の五音である。

1 〔i〕 イ・ヌ イ・ケ イ・マ イ・ク イ・ヨイ・ヨ

2 〔e〕 エ・ダ エ・マ マエ・ テ・キ コメ・

3 〔a〕 ア・サ ア・メ ア・タ・マ・ ナ・ミ・ダ・ ソラ・

4 〔o〕 オ・ニ オ・ト オ・ケ オ・モ・テ オ・ヨ・グ

5 〔ɯ〕 ウ・シ ウ・タ ウ・ス ウ・ミ ウ・ラ

〔備考〕 以上の〔i〕〔e〕〔a〕〔o〕〔ɯ〕は總べて發音記號で、「語音」を表はす。それで a はエイではなく「ア」、o はオウではなく「オ」、等を示す。例語の右に黒點（・）を附けたものはその母音又はその熟音中に含む母音を指す。例へばソラ°は sora 中の〔a〕。

これらの母音の內で、次の二音は〔k・s・h・ʃ・tʃ〕の前、又はアクセントのない語尾にある時は、普通の速さで自然的に讀めば、無聲化する。

i。 チ▽カラ シ▽チ ハチ▽ アリマシ▽タ

u。 デス▽ ツキ▽ ワタクシ▽ デス▽ キマス▽ タク▽サン ツ▽クル アキ▽カゼ

〔備考〕 右方に▽印を附けたのは無聲化の符號である。

尚、(2) o・a も話述の速度によつては、無聲化する事がある。

母音は又、長母音となる事が屢々ある。そして長母音は二重母音（例、「オー」を「オウ」）又は重母音（即ち同一の母

音を重ねること、例、「イー」を「イイ」）となる事もある。が、その標準的な音としては次の通りである。

1 〔i:〕 オヂーサン ニーサン ウツクシー イーマス
2 〔e:〕 センセー エーセー
3 〔a:〕 アー オバーサン オカーサン
4 〔o:〕 モー ソー オーゼー ドヨービ
5 〔u:〕 ユー ユーベ ロクジュー リューグー

〔備考〕文字の右の・印はその母音又はその熟音中の母音が長音であることを示す。

尚又、母音は次のやうな場合に二重母音となる。國語の二重母音は文字や語源の上からは取出して論じ難いが、音聲の方からの自然の姿は矢張り立派な二重母音である。

1 〔ai〕 ナガイ シダイニ ナイテ バンザイ ゴザイマス
2 〔ae〕 カエル オマエ ムカエニ サエヅッテ
3 〔ao〕 アオ カホ ハオリ サオ アオグ
4 〔au〕 マウ ウタウ シマウ カマウ
5 〔ie〕 イエガ ミエマス オシエル キエル
6 〔io〕 ニオイ ヒオイ シオ ヒシオ キオン
7 〔ei〕 キレイナ ネイサン セイグス オーゼイ

8 〔eo〕 テ•オ•イ　ケ•オ•　ヌ•オ•　ソレ•オ•　コレ•オ•

9 〔oi〕 ヒド•イ•　オソ•イ•　ヨ•イ•　オ•イ•ダス　オドロ•イ•テ

10 〔oe〕 コ•エ•ヲ　ホ•エ•ル　モ•エ•ル　カゾ•エ•ル　コ•エ•ダ

11 〔oui〕 オモ•ウ•　サソ•ウ•　カヨ•ウ•　ヨ•ウ•ト•ウ•

12 〔ui〕 フ•イ•テ　ヌ•イ•デ　ワル•イ•　ス•イ•シャ　ム•イ•テ

13 〔ue〕 ウ•エ•　ウ•エ•ル　フ•エ•ル　ツク•エ•　ス•エ•ル　フル•エ•ル

14 〔uo〕 ウ•オ•　コウ•オ•　ツル•オ•　ク•オ•ン　カツ•オ•

子音は次の二十一音（11と13とを各々二つに数へて）である。

1 〔p〕 ニンプ•　デンポ•ー　シンパ•イ　ポ•カポ•カ　ポ•ンプ•

2 〔b〕 バ•ン　ブ•タ　トブ•　アブ•ラ　ユビ•　オバ•ーサン

3 〔m〕 ミ•ズ　ム•ラ　コメ•　マ•チ　ム•スコ　モ•クロミ•

4 〔t〕 ト•キ　タ•カイ　テ•ンキ　タ•ライ　ト•リ　タ•ンポ

5 〔d〕 ド•テ　ド•ロ　マド•　ダ•レ　カラダ•　ダ•ス

6 〔n〕 ナ•カナ•カ　ノ•ド　ナ•ル　ニ•シ　ハナ•シ

7 〔k〕 カ•キ　ケ•ムリ　ケ•シキ　ク•マ　ツク•エ

8 〔g〕 ガ•ッコー　グ•ン　ギ•ン　ゴ•ザイマス　ゴ•ム

9 〔ŋ〕 テガ・ミ エハガ・キ ツギ・ ニゲ・ル クガ・ツ ハゲ・シイ

10 〔s〕 サ・クラ クンス・ サ・ル ソ・ノ セ・イト ス・ソ・

11 〔dz〕又は〔z〕 カゼ・ ネズ・ミ ゼ・ンマイ オカズ・ カナラズ・

12 〔ʃ〕 シ・ロ ムシ・ロ シ・ガツ シ・ャシ・ン バシ・ャ ヤクシ・ョ

13 〔dʒ〕又は〔ʒ〕 オジ・イサン ジ・ンジ・ヤ デンジ・ サンジ・ャク ジ・ョーロ

14 〔ts〕 ツ・ノ ツ・キ ツ・ツ・ミ マツ・ アツ・メル ケンブツ・

15 〔tʃ〕 マチ・ イチ・バン チ・カラ コチ・ラ チ・ョーチ・ョ

16 〔r〕 ラ・ンカン クリ・ クル・ ユル・ ロ・ーソク イロ・リ

17 〔h〕 ハ・チ ハ・シル フ・ク ヒ・ノミ ホ・ス ヘ・ル

18 〔j〕 ヤ・マ ユ・キ ヨ・イ イヤ・ フユ・ オヤ・

19 〔w〕 ワ・タクシ ワ・カイ カワ・ クワ・ ニワ・ サワ・ル

〔備考〕 例語の右の黒點(・)はその文字(熟音)中の子音が見出しの音である事を示す。例へばシンパイ〔ʃimpai〕の〔p〕。

以上の子音の中で、次の七音だけが長子音となる事がある。

1 〔pː〕 テッポ・ー ニッポ・ン イッピ・キ イッハ・イ ラッパ・

2 〔tː〕 チョット・ イッテ・ オモッテ・ キット・ ヤマック・

3 〔kː〕 ガッコ・ー スッカ・リ イッケ・ン コッキ・ ビック・リ

4 〔s:〕 イッソー ブッソー ハッセン イッサイ カッサイ

5 〔ʃ:〕 ザッシ ハッシャク イッシン イッショーケンメイ

6 〔ts:〕 ヤッツ ミッツ サンジッツー

7 〔tʃ:〕 コッチ ハッチャク ボッチャン ショッチュー

尚一つ、子音中に追加すべきものは國語固有の「ン」を表はす音である。

〔ɴ〕 モンオ テンエ グンカンオ

これは母音の前などに現はれる「ン」で、一名通鼻母音（ũ又はŋ̃）[3]と呼ばれるものである。

〔備考〕「ン」（ɴ）以外の「ん」は外國音にもあるが、國語中では、(1) p b m の次の「ん」は〔m〕で表はされ、(2) t d n の次の「ん」は〔n〕で表はされ、(3) k g ŋ の次の「ん」は〔ŋ〕で表記されてゐる。

以上の語音を一覽表にして見ると次のやうになる。

**國語標準音の語音**

| 母音 | | | 子音 | |
|---|---|---|---|---|
| 短 | 長 | 二重 | 短 | 長 |
| i e a o ɯ | i: e: a: o: ɯ: | ai ae ao aɯ ie io ei eo oi oe oɯ ɯi ɯe ɯo | p b m t d n k g ŋ s z ʃ ʒ ts dz tʃ dʒ r h j w | p: t: k: s: ʃ: ts: tʃ: |
| 五音 | 五音 | 十四音 | 二十一音 | 七音 |
| 十音 | | 四十二音 | | |
| 五十二音 | | | | |

〔備考〕 長子音の七種は標準的發音に於ける型であるが、方言又は訛音に於ては〔b、d、n、r、〕などにも現はれる事がある。

例、(G.M.Mori: The Pronunciation of Japanese, pp. 153–155)〔b〕「やっぺえ(やるべえ)」、〔d〕「くって(來るで)」、「ほったす(放り出す)」、〔n〕「ひんなか(日中)」、「とんねえ(取りなさい)」、〔r〕「あっらし(嵐)」、「りっりょ(律呂)」、

さて、これらの諸音が國語の中で、どのやうな割合で活用されてゐるかは、次に揭げる表に依つて、その一斑を知る事が出來る。先づ母音に對する子音の割合を見ると、

| | 母音 | 子音 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 卷一 | 一、六六四 | 一、五五五 | 三、二一九 |
| 卷二 | 三、六一四 | 三、四八一 | 七、〇九七 |
| 卷三 | 六、九三八 | 六、四二六 | 一三、三六〇 |
| 卷四 | 八、四八七 | 七、八五三 | 一六、三四〇 |
| 卷五 | 一〇、七九六 | 一〇、一三〇 | 二〇、九二六 |
| 卷六 | 一一、六四三 | 一〇、五一三 | 二一、九八五 |
| 合計 | 四三、一四四 | 三九、九五八 | 八三、一〇二 |

〔備考〕この表は、先年私が小學校讀本卷一から卷六までを、發音記號に轉寫し、各音の繰返し數を數へたものである。

母音と子音との各合計は殆ど同じに接近してゐる。國語の音が如何に熟音的な特徴を有つてゐるかは、この相半ばした數字で知る事が出來る。因みに英語に就いて、ハーヴァード大學の教育科で調査したものに據ると、

| | 母音 | 子音 |
|---|---|---|
| 繰返數 | 一四一、三四二 | 二三一、三八七 |
| 百分率 | 三七・九 | 六二・一 |

であるから、殆ど一對二の割合である。次に母音の使用順位を見ると、(4)

| | | 繰返し數 | 百分率 |
|---|---|---|---|
| 第一位 | a | 一三、二八四 | 三〇・七八九 |
| 第二位 | o | 九、九八八 | 二三・一五〇 |
| 第三位 | i | 八、八一〇 | 二〇・四一九 |
| 第四位 | e | 四、七八五 | 一一・〇九七 |
| 第五位 | ɯ | 四、六三五 | 一〇・七四三 |

で、これをゴッドフレー・デューイ氏の英音の調査に比べると、(5) 氏の順位は「i・ʌ・æ・iː・e・o・ɛː・ɔː・u」である。概して日英ともに「a」が高位にあり、「u」が低位にあり、「o」や「e」が中位にある事に於て一致してゐる。

又、二重母音は次の通りである。

| | | 繰返し數 | 百分率 |
|---|---|---|---|
| 第一位 | ai | 七三六 | 〇・四一七 |
| 第二位 | ae | 一九六 | 〇・一一一 |
| 第三位 | oi | 一五五 | 〇・〇八八 |
| 第四位 | ei | 一五二 | 〇・〇八六 |
| 第五位 | ɯ | 一二二 | 〇・〇六九 |
| 第六位 | ɯi | 一〇四 | 〇・〇五九 |
| 第七位 | ie | 八七 | 〇・〇四九 |
| 第八位 | ɯe | 八三 | 〇・〇四七 |

| 第九位 | oe | 五六 | 〇・〇三一 | 第十二位 | uo | 五 | 〇・〇〇三 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第十位 | ao | 五〇 | 〇・〇二八 | 第十三位 | io | 二 | 〇・〇〇一 |
| 第十一位 | auı | 一五 | 〇・〇〇八 | 第十四位 | eo | 一 | 〇・〇〇〇六 |

（６）ヂューイのは全二重母音の調査が發表されてないが、第五位までは「ai　ei　au　iu　iu:」である。國語の第一位と第四位と全英語のとよく似てゐるが、國語に於ては「au」が著しく低いのも注目すべきである。

國語の子音の順位は次の通りである。

| | | 繰返し數 | 百分率 | | | 繰返し數 | 百分率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一位 | n | 六、二八六 | 一五・七三一 | 第十一位 | h | 一、三八四 | 三・四六三 |
| 第二位 | t | 五、三三八 | 一三・三三三 | 第十二位 | j | 一、二七九 | 三・二〇一 |
| 第三位 | k | 五、一一〇 | 一二・七八八 | 第十三位 | b | 七五三 | 一・八八四 |
| 第四位 | m | 四、四六一 | 一一・一六四 | 第十四位 | tʃ | 七一八 | 一・七九六 |
| 第五位 | r | 三、四六六 | 八・六七四 | 第十五位 | ts | 五七八 | 一・四四九 |
| 第六位 | s | 二、六一六 | 六・五二一 | 第十六位 | dʒ | 四〇八 | 一・〇二〇 |
| 第七位 | d | 一、八九七 | 四・七四七 | 第十七位 | z | 三〇八 | 〇・七七一 |
| 第八位 | ʃ | 一、七六八 | 四・四二二 | 第十八位 | g | 二二四 | 〇・五六一 |
| 第九位 | ŋ | 一、七五九 | 四・四〇二 | 第十九位 | dz | 一二三 | 〇・三〇八 |
| 第十位 | w | 一、三八九 | 三・四七六 | 第二十位 | p | 一〇二 | 〇・二五五 |

英子音に就いてのデューイの調査に依ると、その順位は「n・t・r・s・d・l・ð・z・m・k・v・w・p・f・h・b・ŋ・ʃ・g・tʃ・j・θ・ʒ」である。偶然にも日英の第一位の「n・t」が合致してゐる。「d」や「r」も高い位置を占めてゐる。「w」は日英ともに凡そ中央の位置を占めて居るが、國語に於ける「p・b」は大變低い。

應用音聲學は諸種の教育方面に、諸種の形式を以つて活用されるが、それぞれの研究に當つて國語を構成してゐる音の「種類」と、その現はれる「頻度」との兩方面を併せて考慮する必要がある。特に後者は、音聲學とは間接に、寧ろ教育學的に善用せられるべき必要のある事を最初に斷つておき度い。

一例を擧げると、吃音者が齒莖破音や、軟口蓋破音に困難を感じてゐるのが目立ち、又本人もそのやうに自覺してゐるやうであるが、一方には國語の音そのものが前表の通り、これらの音を度數多く、即ち「頻度」高く使用してゐる點に原因のある事を認めなければならぬ。又、獨逸では「子音吃り」が多いと言はれてゐるが、獨逸語そのものが語頭に母音をもつ語が少なく、一方、英語國には母音の吃りが確實に認められてゐるなども、翻つてわが國語の構音を顧るべきであらう。敢て以上を掲げて序說とする所以である。

註

1　「教育音聲學」の詳說は本講座中の佐久間鼎「音聲學概說」二〇—二一頁參照。

2　例へば、書かう kakō　こゝら kokora　はは haha　こくもつ kokumotsu—小林好日「國語學概論」一七〇頁。

3　神保格「國語音聲學」七二頁。

4　大西雅雄「頻度から観た素音の價値」(音聲學協會々報第二六號四・五頁)

5、6　Godfrey Dewey: Relative Frequency of English Speech Sounds, P. 125.

# 第二章　單音篇

## 音と文字

天地開闢の初めに「文字」があつて「音」が出來たのではなく、「音」を發するやうになつて後「文字」が出來た事は申すまでもない。「文字」は「音」を表象する表徴（シムボル）に過ぎない、表徴（シムボル）であるから使用者相互の「約束」がなくてはならぬ。「約束」は時の洗錬を經るうちに、より複雜な「慣例（コンベンション）」を作つて來る。

わが國語の假名文字は、最初は表音文字であつた——今も尙、本質としては、さうである。所謂「一音一符」の表音文字であつたから、書いたまゝ、讀むまゝ、が「ことば」の內意を表はす音であつた——そして、今も或る程度まではさうである。處が、いつの間にか、假名に假名遣法が要るやうになつて、それから、その假名は最早や「一音一符」ではなくなつた。

例へば「ふ」は次のやうに三つの働きをする。

「ふ」
- （フ）—ゑふで。
- （ウ）—おもふ。
- （オ）—あふひ。

この場合、「ゑふで」「おもふ」「あふひ」に更に讀み假名を付けて、「ゑふ（フ）で」「おもふ（ウ）」「あふ（オ）ひ」とするか、又は〔efude〕〔omou〕〔aoi〕と書き直す時・これらの「ことば」は嚴密に音象徵に改められた事になる。後者は文字と云ふよりは「記號」である。「ことば」の歷史的や語源的に關係なく、純粹に「音」だけを問題として、その表示に當る一つの道具（ツール）である。「耳」に感じる音は、これによつて「目」に訴へ直す事が出來る。又逆に、この記號を「目」に感受する事から「耳」が納得する音を「口」から發せしめる示唆を與へる役目をも司る。

例へば「とうきやう」と言ふ假名遣が「トーキョー」と音表文字に改められた時、そこには紛らはしさのない「音」が直ちに現はれる。

このやうに、音表文字に改める事と、それを讀む事と、又本來の正音を練習する事、とは國語音聲學の極く最初の——而かも極く大切な——應用方面である。

マクス・ミュラーが（1）「ＡＢＣよりも優しいものがあらうか、而かも尚ほ檢べて見てこれよりも六かしいものがあらうか」と言つてゐる通り、假名の音も逐條的に調べて見れば、決して容易な業ではない。

先づ最初に假名の有つ通常の場合の「音」を點檢して見る。次に揭げる表で「アーa」は、「ア」といふ假名文字が表示する音が發音記號で示す〔a〕の音に當る場合を意味する。假名文字の直ぐ下に記した數字は小學讀本卷一に現はれる頁である。上の（）括弧內の數字は改定讀本で、下の〔〕括弧內のは舊讀本である。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ア(5)〔6〕—〔a〕 | イ(1)〔8〕—〔i〕 | ウ(11)〔5〕—〔ɯ〕 | エ(16)〔22〕—〔e〕 | オ(5)〔7〕—〔o〕 |
| 2 | カ(5)〔3〕—〔ka〕 | キ(11)〔9〕—〔ki〕 | ク(2)〔7〕—〔kɯ〕 | ケ(15)〔14〕—〔ke〕 | コ(3)〔9〕—〔ko〕 |
| 3 | サ(1)〔3〕—〔sa〕 | シ(3)〔5〕—〔ʃi〕 | ス(4)〔2〕—〔sɯ〕 | セ(24)〔11〕—〔se〕 | ソ(9)〔22〕—〔so〕 |
| 4 | タ(1)〔10〕—〔ta〕 | チ(12)〔15〕—〔tʃi〕 | ツ(14)〔14〕—〔tsɯ〕 | テ(8)〔7〕—〔te〕 | ト(7)〔2〕—〔to〕 |
| 5 | ナ(7)〔1〕—〔na〕 | ニ(7)〔9〕—〔ni〕 | ヌ(23)〔8〕—〔nɯ〕 | ネ(10)〔9〕—〔ne〕 | ノ(6)〔3〕—〔no〕 |
| 6 | ハ(6)〔1〕—〔ha〕 | ヒ(5)〔6〕—〔çi〕 | フ(18)〔20〕—〔ɸɯ〕 | ヘ(4)〔25〕—〔he〕 | ホ(17)〔23〕—〔ho〕 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 7 | マ (5)〔2〕—[ma] | ミ (10)〔3〕—[mi] | ム (26)〔21〕—[mɯ] | メ (4)〔2〕—[me] | モ (16)〔6〕—[mo] |
| 8 | ヤ (10)〔7〕—[ja] | (イ)—[i] | ユ (23)〔24〕—[jɯ] | (エ)—[e] | ヨ (16)〔20〕—[jo] |
| 9 | ラ (2)〔3〕—[ɾa] | リ (10)〔6〕—[ɾi] | ル (6)〔10〕—[ɾɯ] | レ (7)〔12〕—[ɾe] | ロ (3)〔8〕—[ɾo] |
| 10 | ワ (23)〔15〕—[wa] | ヰ (15)〔4〕—[i] | (ウ)—[ɯ] | ヱ (18)〔22〕—[e] | ヲ (17)〔10〕—[o] |
| 11 | ン (6)〔21〕—[n] | | | | |
| 12 | ガ (2)〔4〕—[ga] 又は [ŋa] | ギ (20)〔10〕—[gi] 又は [ŋi] | グ (18)〔32〕—[gɯ] 又は [ŋɯ] | ゲ (16)〔14〕—[ge] 又は [ŋe] | ゴ (27)〔30〕—[go] 又は [ŋo] |
| 13 | ザ (6)〔38〕—[za] | ジ (18)〔22〕—[ʒi] | ズ (27)〔4〕—[zɯ] | ゼ (27)〔20〕—[ze] | ゾ (32)〔30〕—[zo] |
| 14 | ダ (19)〔11〕—[da] | ヂ (21)〔39〕—[dʒi] | ヅ (32)〔15〕—[dzɯ] | デ (9)〔11〕—[de] | ド (30)〔17〕—[do] |
| 15 | バ (6)〔7〕—[ba] | ビ (24)〔17〕—[bi] | ブ (31)〔23〕—[bɯ] | ベ (25)〔36〕—[be] | ボ (29)〔25〕—[bo] |
| 16 | パ (30)〔31〕—[pa] | ピ (12)〔39〕—[pi] | プ (29)〔33〕—[pɯ] | ペ (25)〔36〕—[pe] | ポ (21)〔33〕—[po] |
| 17 | キャ—[kja] | | キュ—[kjɯ] | | キョ—[kjo] |
| 18 | シャ (24)—[ʃa] | | シュ—[ʃɯ] | | ショ (68)—[ʃo] |
| 19 | チャ (37)—[tʃa] | | チュ (47)—[tʃɯ] | | チョ—[tʃo] |
| 20 | ニャ—[nja] | | ニュ—[njɯ] | | ニョ—[njo] |
| 21 | ヒャ—[çja] | | ヒュ—[çjɯ] | | ヒョ—[çjo] |
| 22 | ミャ—[mja] | | ミュ—[mjɯ] | | ミョ—[mjo] |

| 23 | リャ | 〔ŀja〕 | リュ | 〔ŀjɯ〕 | リョ | 〔ŀjo〕 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | ギャ | 〔ɡja〕は又〔ŋja〕 | ギュ | 〔ɡjɯ〕は又〔ŋjɯ〕 | ギョ | 〔ɡjo〕は又〔ŋjo〕 |
| 25 | ジャ | 〔ʒa〕 | ジュ | 〔ʒɯ〕 | ジョ | 〔ʒo〕 |
| 26 | ヂャ | 〔dʒa〕 | ヂュ | 〔dʒɯ〕 | ヂョ | 〔dʒo〕 |
| 27 | ビャ | 〔bja〕 | ビュ | 〔bjɯ〕 | ビョ | 〔bjo〕 |
| 28 | ピャ | 〔pja〕 | ピュ | 〔pjɯ〕 | ピョ | 〔pjo〕 |

〔備考〕但し改定讀本は「扉」の裏から教材があつて、之が「二頁」とされて居る。つまり「扉」が一頁であつて、教材は一頁にはないのである。舊讀本との對照の便から、本表では教材の實際上の第一頁を第一頁としておく。

第1行第8行の「イ」及び第10行の「ヰ」は共に〔i〕で、音に變りはない。又、第1行第10行の「ウ」はともに脣の圓みを缺いた〔ɯ〕である。この圓みを缺いた〔ɯ〕は、同時に横へウ列全體に及んでゐる。第1行第8行の「エ」も、第10行の「ヱ」も一元の〔e〕である。第1行第10行の「オ」「ヲ」も同一の〔o〕である。それで、第8行はその半子音要素を有つた「ヤ・ユ・ヨ」第10行は「ワ」を除けば第1行の純母音行と變りはない。これらの文字は「音」から言へば存在價値のないものであるだけに、「文字」から言へば、音の統一的教育が必要になる。

第2行の「キ」は〔ki〕よりも幾らか口蓋化してゐるが、精密に過ぎるから標準音の教育程度からは問題にしなくともよい。第3行では「シ」だけが第18行の子音〔ʃ〕を取入れてゐる。第4行では「チ」が第19行から〔tʃ〕を取入れ、又「ツ」が別にあるべき「ツァ・ツィ・ツ・ツェ・ツォ」の行から子音〔ts〕を借入れてゐる。「ツァ」行は國語中にも方音としては相當

に使はれてゐるものが多い。第5行の「ニ」も前述の「キ」と同様に口蓋化する性質があるけれども、教育上區別しなければならぬ程のものではない。

第6行では「ヒ」の子音が〔j〕の無聲音〔ç〕である事が「ハ」の子音と違つてゐる。ローマ字の綴りではhで代表させておいてもよからうが、發音記號では區別して特に注意を促すのがよい。實際の發音に際しても明瞭に出す爲めには、稍く努力の要る音である。同じ行で「フ」の子音が矢張り氣音〔h〕でない。この子音の記號は〔f〕でも構はないのであるが、近來の國語中には外來語が多く含まれてゐて、〔f〕本來の唇齒音の反省を要する折柄であるから、それらを助長する點に於て、寧ろ國語の兩唇音記號を讓歩して〔ɸ〕で現はすのが宜しからう。

第9行の子音は、側音〔l〕や摩擦音〔r〕と區別して國語特有の彈音を示す必要がある。音聲學協會では(2)〔ɾ〕を用ひてゐる。

第10行の子音は〔w〕ほど唇の圓みが伴はない。記號は〔w〕を代用するか〔ɯ〕を使つてもよいが音聲學協會では〔ɰ〕の約束になつてゐる。

第11行の「ン」は既に述べた通り、四通りに分け得るが、國語特有の通鼻母音の場合は〔ɴ〕である。

第12行には各字とも二通りの音がある。その子音は破裂音の〔g〕と通鼻音の〔ŋ〕とである。

第13行と第14行で「ジ（ʒi）」と「ヂ（dʒi）」の區別、「ズ（zɯ）」と「ヅ（dzɯ）」の區別は、標準語では最早や「文字上」に止まり、「音」としては何等の區別がない。地方又は個人によつて、その何れかが用ひられてゐるのであるが、東京では假名遣に拘らず〔dʒi〕〔dzɯ〕を使つてゐる(3)。

第18行も第19行も所謂拗音として別扱ひをされてはゐるが、單子音を含む點に於ては第16行までの諸音と變りはない。これらの行が「シ」「チ」の二音を第3行と第4行とへ貸してゐる事は前述の通りである。それで、音練習などには相關的練習が便利である。

第21行は半子音〔j〕を伴ふ故に、今一つの子音は「ヒャ ヒュ ヒョ」共に〔h〕でなく〔ç〕になる。

第24行は第12行と同様に〔g〕〔ŋ〕の兩子音に發音される。〔g〕は語頭で、〔ŋ〕は語中又は語尾である。

第25行第26行は、第13行第14行に〔ʒi〕〔dʒ〕を貸してゐる。單子音を含んで居る點に於て兩者の間に相違はないから、拗音と特稱される理由は生れて來ない。

文字教育の最初である小學讀本卷一(4)は、上表に示したやうに第16行までは——その提出順序の適否は別として——兎も角第三十三頁までに出揃つてゐる。けれども第17行以下からは「シャ」「ショ」「チャ」「チュ」の四個以外は現はれない。而かもこれら以外のもので「五段の各行」と關係あるもののあることは前にも述べた通りである。所謂「拗音」は文字の配置形式の名稱であつて、音聲學上の定義ではない。假に音聲學上、複子音から成る熟音を拗音と呼ぶものとすれば、左の各行は正に「五段」を獨立し得るものであるから「拗音」外に設けられるべきものである。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| シャ〔ʃa〕 | シ〔ʃi〕 | シュ〔ʃɯ〕 | シェ〔ʃe〕 | ショ〔ʃo〕 | ジャ〔ʒa〕 | ジ〔ʒi〕 | ジュ〔ʒɯ〕 | ジェ〔ʒe〕 | ジョ〔ʒo〕 |
| チャ〔tʃa〕 | チ〔tʃi〕 | チュ〔tʃɯ〕 | チェ〔tʃe〕 | チョ〔tʃo〕 | ヂャ〔dʒa〕 | ヂ〔dʒi〕 | ヂュ〔dʒɯ〕 | ヂェ〔dʒe〕 | ヂョ〔dʒo〕 |

更に又次の五行の如きは音練習(5)としては是非備へらるべきものである。

| サ〔sa〕 | スィ〔si〕 | ス〔su〕 | セ〔se〕 | ソ〔so〕 | ズァ〔za〕 | ズィ〔zi〕 | ズ〔zu〕 | ゼ〔ze〕 | ゾ〔zo〕 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| タ〔ta〕 | ティ〔ti〕 | ト〔tu〕 | テ〔te〕 | ト〔to〕 | ダ〔da〕 | デ〔di〕 | ド〔du〕 | デ〔de〕 | ド〔do〕 |
| ツァ〔tsa〕 | ツィ〔tsi〕 | ツ〔tsu〕 | ツェ〔tse〕 | ツォ〔tso〕 | ヅァ〔dza〕 | ヅィ〔dzu〕 | ヅ〔dzu〕 | ヅェ〔dze〕 | ヅォ〔dzo〕 |

以上の如き國語の諸音が、假名遣法のために特殊の約束を守らせられる事になつてゐる。國語には假名遣法といふやうな法則が何故必要か、それは「語源」の問題であり、「語法」上の問題である。それでは、假名遣法とは音聲上如何なる「現象」か、これこそ音聲學の解明すべき問題である。先づ、假名遣の約束に依つて、一定の音に働く文字を分類して列擧しよう。

短母音(A)

1〔i〕「い」「ゐ」　2〔u〕「う」「ふ」　3〔e〕「え」「へ」「ゑ」　4〔o〕「お」「ほ」「を」

五つの母音中で右の四つだけが二種以上の表音方法を有つてゐる。〔a〕を示す文字は「あ」一つである。又短母音を含んで熟音となるものの中で、表音法を二種以上有つてゐるものは、次の三つである。

短母音(B)

1〔u〕〔zu〕「ず」「づ」　2〔i〕〔ʒi〕「じ」「ぢ」　3〔a〕〔ka〕「か」「くゎ」〔wa〕「わ」「は」

長母音(A)

1〔oː〕「おう」「あう」「あふ」「をう」「わう」「はう」「はふ」「ほう」「ほふ」

熟音中の母音要素としての長母音に働く文字は、以下に擧げる二た通りであるが、獨立し得る長母音としては、この

[ɔ:]の外にはない。

長母音(B)

1 [o:]

po: 「ぽう」「ぱう」「ぽふ」
bo: 「ぼう」「ばう」「ばふ」
mo: 「もう」「まう」
to: 「とう」「たう」「たふ」
no: 「のう」「のふ」「なう」「なふ」
ko: 「こう」「かう」「かふ」「こふ」「くゎう」
go: 「ごう」「がう」「がふ」「ごふ」「ぐゎう」
so: 「そう」「さう」「さふ」「そふ」
ʃo: 「しょう」「しゃう」「せう」「せふ」
tʃo: 「ちょう」「ちゃう」「てう」「てふ」
l·o: 「ろう」「らう」「らふ」
jo: 「よう」「えう」「えふ」「やう」
ho: 「ほう」「はう」「はふ」「ほふ」

2 [ɯ:]

njɯ: 「にゅう」「にう」「にふ」

pjo: 「ぴょう」「ぺう」
bjo: 「びょう」「べう」
mjo: 「みょう」「みゃう」「めう」
do: 「どう」「だう」「だふ」
njo: 「にょう」「にゃう」「ねう」
kjo: 「きょう」「きゃう」「けう」「けふ」
gjo: 「ぎょう」「ぎゃう」
zo: 「ぞう」「ざう」「ざふ」「ぞふ」
ʒo: 「じょう」「じゃう」「ぜう」「ぜふ」
dʒo: 「ぢょう」「ぢゃう」「でう」「でふ」
l·jo: 「りょう」「りゃう」「れう」「れふ」
çjo: 「ひょう」「へう」「ひやう」

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| kjuː | 「きゅう」 | 「きう」 | 「きふ」 | |
| ʃuː | 「しゅう」 | 「しう」 | 「しふ」 | |
| tʃuː | 「ちゅう」 | 「ちう」 | 「ちふ」 | |
| juː | 「ゆう」 | 「いう」 | 「いふ」 | 「ゆふ」 |
| gjuː | 「ぎゅう」 | 「ぎう」 | 「ぎふ」 | |
| ʒuː | 「じゅう」 | 「じう」 | 「じふ」 | |
| dʒuː | 「ぢゅう」 | 「ぢう」 | 「ぢふ」 | |
| rjuː | 「りゅう」 | 「りう」 | 「りふ」 | |

長母音の〔B〕は文字から計り見ると非常に複雑であるが、歸する所、〔oː〕と〔uː〕の二つの長母音を作り出す事にある。そして、これが爲に用ひられてゐる語尾の文字は「う」と「ふ」の二個である。この二文字は〔oː〕にも〔uː〕にも共用されて、双方に於てそれぞれの働きをしてゐる。又この二文字は短母音の〔A〕に於て〔u〕と働いたのであるが、それが長母音に働く時は〔uː〕の約二倍もある〔oː〕の方に働いてゐる所に、この文字の表音認識上の困難がある。

又、長母音〔B〕の中の所謂拗音の表記には「ゆ」「よ」「や」が、或は他の文字と同じ大きさに、或は一層小さく、用ひられる事になつてゐるが、これらの拗音文字は〔uː〕に於ては無くても同じ事になつてゐる。例へば、

「きゅう」＝「きう」　「ぎゅう」＝「ぎう」　「しゅう」＝「しう」　「じゅう」＝「じう」

「ちゅう」＝「ちう」　「ぢゅう」＝「ぢう」　「りゅう」＝「りう」

假名遣法は以上のやうに母音の問題、その内でも長母音の表記法が主要なものになつてゐるが、なほ、子音に於ても同様に長子音の問題と言ふ事が出來る。例へば、「がくかう」（學校）、「とくかう」（德行）も、音から言へば「ガッコー」、「トッコー」であつて「ガ・ク・カ・ウ」、「ト・ク・カ・ウ」ではない。

即ち「ガッコー」 [gakko:] 又は [gak:o:]、 「トッコー」——[tokko:] 又は [tok:o:] で所謂「促音」である。「促音」は要するに「長子音」である。

斯くて、假名遣法を音韻現象から要約すると、その主なる一つは「長母音」「長子音」の表記法の問題である。即ち長音表記の「ー」又は「ー」に相當する符號を採用しない爲に、一定の音價を有する文字を更に他へ「音」に讀ませる作用である。第二は二種以上の文字が重複して同一の音價に用ひられるもの、又は一種の文字が二種以上の音價に用ひられるものがある爲に、その活用を規定したものであると言へよう。

なほ又、文字に就て同樣の結論の言ひ得るのは、「ローマ字の綴方」に關する問題である。今わが國には所謂ヘボン式と日本式とがあつて、兩者が激しく論爭を交へてゐる。音聲學は之に對して加へるべき幾多の批判點を有つてゐるが、終局は「事實」と「約束」の合理的一致點を見出すこと、即ち「音と文字」の問題である。具體的にいふと、

[ʃi]　に當る音は、　shi, si　の代りに、ʃi を、

[tʃi]　に當る音は、　chi, ti　の代りに、tʃi を、

[ʒi](又は[dʒ])　に當る音は、　ji, zi　の代りに、ʒi（又はdʒ）を、

それぞれ綴字として新たに認め、又ga行の外にŋa行を新設する處まで進めば文句はないのである。[6]

**註**　1　"What can seem simpler than the ABC, and what is more difficult when we come to examine it?" -- Mx Müller.

2　これは「ー」と「r」とを組み合せた字形。音聲學協會々報第十三號五頁に所載。但し簡略表記法では從前通り「r」が一般に用ひられてゐる。

3　神保格「國語音聲學」(三四頁)本講座。

4　小學讀本の改訂版卷一に就いて、本講座第一冊所載「國語」中に、參考資料として、卑見を發表しておいた。

5　「音練習」としての各行。神保格・大西雅雄「國語の標準發音」それぞれの頁。

6　この新字新設に就ては、「國語問題」(三宅武郎氏主宰國語協會)も夙に主唱する所で、東大言語學會も同様の理想案を示唆してゐる。「日本語をローマ字で書く上の綴り方に關する意見書(十四頁)」。

## 標準音と方音

標準音とは「標準語」を朗讀し又は語るのに適する音であり、方音とは各地の「方言」を各地それぞれの慣はしに依つて讀み又は言ひ現はす音である。

標準語を使用する人が東京に多く住んでゐるとか、或は東京で教育を受けて地方に行つて住んでゐるとかは、或は實際の現象であるかも知れない。けれども所謂「東京語」が直ちに標準語であるとは言はれない。何故ならば東京語の内にも東京方言を多分に含んでゐるからである。(1)

標準音の範圍の限定には廣義と狹義、又は嚴緩精粗の差があるであらうし、そしてこれらの限界も時間的に常に推移しつゝもあらう。が然し、出來るだけ個性的具體語でなく共通的抽象語であるものほど一層標準的な語であると言ふ事が出來よう。標準的といふ事を明かにする爲めには、標準語そのものを第一次的、第二次的等の段位に分けて考へる事が適當であらうと思ふ。さうすれば、標準的な要素と方言的な要素とは、その段位に應じて反比例するであらう、例へば左表に示すやうに、

| | 標準要素／方言要素 |
|---|---|
| 第一次的 | あなた　わたくし |
| 第二次的 | あんた　わたし　きみ　ぼ…く |
| 第三次的 | あゝた　わし　お前　おれ |
| 第四次的 | きさま　わがはい　おめえ　あたい　わたい |
| 第五次的 | おぬし　ぬし　のし　おい　おら　てめえ　うち　わい　わき　わぎ　わっち　こちとら |
| 第六次的 | 〔隱語〕　〔暗號〕 |

「音」も矢張り「語」の標準的と否とに應じて、その共通性が反比例して行く。「語數」から言ふと標準的なものは、方言の總數に比べると問題にならぬほど少數であらうが、「語音」の數から見ても同樣に、標準語に用ひられるものは全方言に用ひられるものとは比較にならぬほど少いだらう。それで、全國の「方音」を調べ上げる事が、よし絕對的に不可能事であるとしても、標準的な少數の音を全國人に理解させ、應用させる事は決して不可能事ではない。否、現在

でも既に少數の例外を除いては、標準的な讀物には共通して實用に供されてゐるのである。

この「共通」の範圍外にあつて、各地で自由に活躍してゐるのは「方言」中の「方音」である。しかし、これらも漸次、「方音」そのものの研究に伴つて、その姿が明かにされ、又相互の練習にも資されて行くであらう。

次の表は音聲學協會[1]が東京音表示に用ひる音聲記號として制定したものから、特に「標準語」表示に用ひる記號だけを掲げたものである。即ちこれだけあれば

| | | 兩脣 | 齒莖 | 硬口蓋 | 軟口蓋 | 聲門音 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 子音 | 破音 | p b | ts dz　t d　tʃ dʒ | | k g | |
| | 通鼻音 | m | n | | ɲ ŋ | |
| | 彈音 | | ɾ | | | |
| | 擦音 | ɸ w | s z　ʃ z | ç j | | h |
| 母音 | 小開き | | | i | ɯ | |
| | 半開き | | | e | o | |
| | 大開き | | | a | | |

「標準的な音」は先づ表記出來る筈である。

尚、右の補助記號としては次の如きがある。

長音符には、全長「ː」、半長「ˑ」。變母音符「¨」。口蓋化符「˙」。無聲化符「˳」。有聲化符「ˬ」。鼻音化符「~」。休息符には、短「ˈ」、中「|」、長「[illegible]」。アクセント符には、下「[illegible]」又は「[illegible]」、上「[illegible]」又は「[illegible]」。調子符には、平「→」、降「↘」、昇「↗」。

次に「方音」に就いて言ふと、「摩擦附き破裂音」の有聲音の〔dz〕〔dʒ〕は、それぞれ〔z〕〔ʒ〕と區別の出來る地方にのみ存在する譯であるが、我々はこれを、例へば四國の土佐邊の人々に聽く事が出來る。國語が文字の上では兩者の書き分けをして居り乍ら、音の方ではその正しい使ひ分けの出來る者を却つて、地方的に取扱ふやうになつたのも國

語音の變遷史上やむを得ない事であらう。別にこの使ひ分けを排さない迄も、標準音に使ひ分けを強い得ない事は明かである。

摩擦音の內では、有聲兩唇音の〔w〕が唇に一層丸みを帶びる事がある。概して關西人が東京人よりもその傾向を有つてゐるが、特に「クヮ」と言ふ連音に於て著しい。「社會」「華族」「愉快」などに於て「クヮ」と發音する事は標準音では既に完全に消失してゐるのであるが、近畿・中國・四國・九州更に琉球に於ても、この音を保有してゐる人が多い。

「備考」　文獻に就て文字上で右の兩音を含む比率は、私の調べた所では、「カ」の九八・四八に對して「クヮ」は一・五一である。

又「ガ」の九八・七に對して「グヮ」は一・二九である。

唇齒摩擦音の〔f〕〔v〕は今日では方音と言ふよりも、外來語に對する補充音として、教養ある人々に依つて廣く用ひられてゐるから、早晚は標準音中に加へらるべきものであらう。然し、國語の方音中にも、例へば北越地方に於ては、この音を「フィ(火)」「フィル(晝)」等に聞く。

舌齒摩擦音の〔θ〕〔ð〕も同樣に外國語に對する教養ある人々の音として主に外來語に聞く事が多い。しかし尙、個人的に所謂「舌の長い人」の話音としても屢〻現はれる。

通鼻音の內に〔m〕の變形と見るべき唇齒音〔ɱ〕がある。これは東北の人が「サムイ(寒)」などと言ふ時に現はれるといふ。

齒莖音の〔n〕は次に〔j〕を作ふと口蓋化して〔ɲ〕になる。「ニ」「如來」「糞尿」「女人」などに現はれるのは必ずしも方音とは限るまい。

側音の「l」に摩擦音の「r」が、彈音「ト」の代りに用ひられる事がある。これは特定の地方とか、特定の單語ではなく、個人的の問題であるらしい。謂はゞ、その人の癖であり、個性である、さう云ふと同一の人が、語氣とか調子に依つて、混ぜて使用する事もある。

東京の方言として廣く知られてゐるものは、所謂、江戸ッ子の「べらんめェ口調」に現はれる「ら」―「ṝ」である。これは舌を著しく巻き上げて、――「ト」なら一回振動の所を――續く數回續けて振動させるのである。

母音の中では「ɨ」が「イ」と「エ」の中間音として現はれる。東北のズーズー辯にも、又東京・千葉・埼玉邊りの音にも頻繁に現はれる。「イ」を用ひるべき時にこの音を發すると「エ」に聞え、「エ」と言ふべき時にこの音を聞かせると「イ」に認められる。但し本人は別にこの音（記號では「ɨ」に當る）を出してゐると意識してない場合――假令後ほど氣付くとしても――が多い。

「ɛ」は東京方言に於て「おめえ」「てめえ」「どうでえ」「けーる」などにも現はれるし、全國的にも幼兒の言ひ癖、その他で現はれる。

「æ」は岡山などで「おけあやま」「しらにゃー」「きょうでぁ」等に現はれる外に、一般的母音としても聞く事がある。

「ə」「ʌ」は標準音「a」の變種として、連音中の位置に依つて、又は言葉調子に依つて、各地に、又各人に、用ひられる。

「ɔ」も地域には「o」の變種として、例へば感歎詞の中などに於て現はれる。

「ü」「ö」のやうな前進した音、つまり曖昧にされた音は言葉遣ひの鮮かでない場合に現はれる。その原因は地方

であつたり、早口であつたり、個性であつたり、何か障害による事が多い。國語の音としては餘り「齒切れ」のよくない音である。大阪の言葉などはこれに近い。標準音以外の音を上揭の如く一覽表にして示してみる。

| | 兩唇 | 唇齒・舌齒 | 齒莖 | 硬口蓋 | 軟口蓋 |
|---|---|---|---|---|---|
| 摩擦音 | w | fv ðθ | | r | |
| 通鼻音 | | ɱ | | ɲ | |
| 捲舌音 | | | ɽ | | |
| 側音 | | | l | | |
| 小開き母音<br>半開き母音<br>大開き母音 | | | | ɩ<br>ɛ<br>æ | u:<br>ö o: ʌ<br>ɔ |

註 1　石黒魯平「標準語の問題」本講座第一輯、十一頁。「故に都にも鄙にも共に方言を持つてゐるのである。このことを早く看破した新井白石は尊敬に値ひする。白石は『東雅』の總論に於て、言語學上の見識を光らせてゐるが、その中に『ヨといふ言また詞の助を得て、ヨシといひしに、其詞亦轉じて今の如きは、中土東西南北の方言によりて、ヨシといひヨキといひヨカといひヨクといひヨフなどともいふ』といつて、中土即ち中央の言語にも方言の名を附けて居る。」

2　音聲學協會々報第十三號第五頁。

## アクセントの二型

國語の音聲教育のうちで、アクセントの認識とその練習とは大切な役割の一つである。今日のところ、全日本のアクセント形式は、所謂「東京訛」なる「標準アクセント」(1)をA型とすると、このAに非ざる他の型、例へば「京都訛」などに屬するB型、即ち「地方アクセント」の二型である。よし今後、AB兩型以外のものが部分的に調べ出されるにしても、教育上當面の大きな研究問題はこの兩型の具體的な、又簡易な識別

法にあると思ふ。本稿に於ては、その研究の緒口として、東西二大型の基本的な記述を提供しよう。

先づ最初、アクセントには「型」がある事を認めねばならぬ。この型と稱するものは、アクセントの高低を上中下の[2]三段に觀るか、又は上下の二段[3]に觀るかから決定して掛らねばならぬ。謂はゞ前者は精密式で後者は簡略式である。音律記號にもこの精粗兩式がある。が筆者は前章にも述べた主旨に依つて、本稿では簡略式に據ることにした。アクセントの教育的價値に於ても、第二「秋」(上下)、第二「明き」(下中)、第三「飽き」(下上)の三者に於て、第二を「下降型」とすれば、第二・第三は共に「上昇型」で充分であると信じる。その理由は、

1　第二と第三との識別は一般人の耳に過ぎたる重荷であること。

2　第二第三の實例は極めて稀れであり、又、實際に當つても兩者の混同が少いこと。

それで、この二段觀に依つて、一切のアクセントの型を分けると、次の四種になる。

1　皆平ら（平がた）●●●　又は　━（みみづ）

2　頭高か（頭上げ）○●●　又は　（へ　び）

3　頭低く（潛　り）●○○　又は　（もぐら）

4　中高か（猫　背）●○●　又は　（ね　こ）

右の四種の型は、幾音節の語にも共通して現はれる。そして、2・3・4の「頭」に當る音節は常に一音節の長さに限つてゐる。又、國語の語彙のうちで、最も多くを占めてゐるものは、第一位が四音節語で、第二位が三音節語で、第三位が五音節語である。

〔備考〕音節の數に就て、筆者の調べた所に據ると、最も通俗的な二四、三六三語では、その百分率は次の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一音節語 | 〇・〇〇三八一 | 七同 | 〇・〇二〇六四 |
| 二同 | 〇・〇七四〇四 | 八同 | 〇・〇〇四九二 |
| 三同 | 〇・二八二四七 | 九同 | 〇・〇〇〇五〇 |
| 四同 | 〇・四〇三〇一 | 一〇同 | 〇・〇〇〇二四 |
| 五同 | 〇・一四四一一 | 一一同 | 〇・〇〇〇四〇 |
| 六同 | 〇・〇六九六五 | | |

從つて、研究の實用價値もこの三・四・五音節の語にあるが、その難所も亦、こゝにあると言つてよい。

一、二音節の語はパーセンテージからは六、七音節の語の數に近いが、その實用價値は前者の方が遙かに大である。試みに辭書に就いて、一音節の語を引出して見るに、「あ・お・そ・ぬ・ら・る・れ」以外の音節は、それぞれ獨立した言語としての「音義」を有つて居り、又、その內の大部分は、「耳に聽いて解し得る國語音（漢字音でなく）」を備へてゐる。

先づこの「一音節語」に就いて、所謂「關東」「關西」のアクセントの相違を調べて見よう。一音節の語は「頭高か」「頭低く」の頭だけと看做して、高いものには傍線（｜）を引き、低いものは無記號とする。

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 胃 | イ | イイ |
| 氣 | ケ | ケエ |
| 酢 | ス｜ | スウ｜ |

| 柄 | 繪 | 緒 | 尾 | 蚊 | 蛾 | 木 | 黄 | 氣 | 句 | 區 | 苦 | 荷 | 二 | 根 | 價 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| エ | エー | オ | オー | カ | ガ | キー | キ | キ | クー | クー | クー | ニー | ニー | ネー | ネ |
| エエ | エエー | オオ | オオー | カア | ガア | キイー | キーイ | キイ | クウー | クウー | クツ | ニイー | ニイ | ネエ | ネーエ |

| 毛 | 子 | 粉 | 五 | 碁 | 差 | 四 | 市 | 詩 | 字 | 地 | 巣 | 樋 | 府 | 譜 | 屁 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ケ | コ | コー | ゴ | ゴー | サー | シー | シ | シ | ジー | ヂー | ス | ヒ | フー | フ | ヘー |
| ケーエ | コオ | コオー | ゴオ | ゴオー | サアー | シイー | シイ | シイ | ジイー | ヂイー | スウ | ヒイ | フウー | フウ | ヘニー |

| 洲 | 圖 | 田 | 血 | 地 | 字 | 痔 | 津 | 手 | 戸 | 名 | 菜 | 箕 | 目 | 芽 | 藻 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ス | ズ | クー | チ | チー | ジー | ジ | ツー | テー | ト | ナ | ナー | ミー | メ | メー | モ |
| スウ | ズウ | タアー | チーイ | チイー | ヂイー | ジイ | ツウー | テエー | トオ | ナーア | ナアー | ミイー | メエー | メエー | モーオ |

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 野 | ノ\| | ノオ\| |
| 葉 | ハ | ハ\|ア |
| 場 | バ\| | バア\| |
| 火 | ヒ\| | ヒイ\| |
| 日 | ヒ | ヒ\|イ |

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 穗 | ホ\| | ホオ\| |
| 帆 | ホ | ホオ |
| 間 | マ | マア |
| 身 | ミ | ミイ |
| 三 | ミ | ミ\|イ |

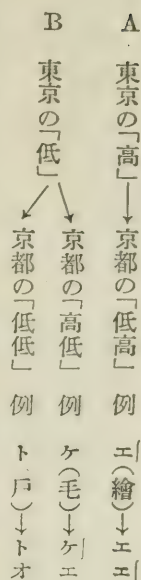
| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 湯 | ユ\| | ユウ\| |
| 里 | リ | リイ |
| 櫓・絽・爐 | ロ | ロオ |
| 輪 | ワ\| | ワア\| |

これに依つて、一音節の東西アクセントの相違を概括すると、次のやうになる。

1　東京の一音節語は京都で二音節になる。

2　その型は次のやうに變る。

A　東京の「高」――→京都の「低高」　例　エ|(繪)↓エエ|

B　東京の「低」↗京都の「高低」　例　ケ(毛)↓ケ|エ
　　　　　　　↘京都の「低低」　例　ト(戸)↓トオ

右の外に型破りの例外語が少數ある。例へば、ウ(鵜)↓ウ|ウ、ネ(音)↓ネエ|、ハ|(齒)↓ハ|ア、ヤ|(矢)↓ヤ|ア、エ|(餌)↓エ|エ、の如きである。

次は二音節語であるが、これは詳しく三段式に分けると、「下中」「下上」「上中」の三種がある。二段式では前の二者は共に「頭低く」型であり、後者は「頭高か」型である。その一斑を東西對照して擧げると、

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 雨 | アメ | アメ |
| 飴 | アメ | アメ |
| 兄 | アニ | アニ |
| 石 | イシ | イシ |
| 今 | イマ | イマ |
| 海 | ウミ | ウミ |
| 桶 | オケ | オケ |
| 型 | カタ | カタ |
| 傘 | カサ | カサ |
| 金 | カネ | カネ |

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 籠 | カゴ | カゴ |
| 君 | キミ | キミ |
| 口 | クチ | クチ |
| 靴 | クツ | クツ |
| 猿 | サル | サル |
| 汁 | シル | シル |
| 杉 | スギ | スギ |
| 墨 | スミ | スミ |
| 蕎麥 | ソバ | ソバ |
| 空 | ソラ | ソラ |

| | 東京 | 京都 |
|---|---|---|
| 土 | ツチ | ツチ |
| 鶴 | ツル | ツル |
| 梨 | ナシ | ナシ |
| 橋 | ハシ | ハシ |
| 箸 | ハシ | ハシ |
| 豆 | マメ | マメ |
| 山 | ヤマ | ヤマ |
| 宿 | ヤド | ヤド |
| 夜 | ヨル | ヨル |
| 藁 | ワラ | ワラ |

二音節の語彙は一音節のものに比べて遙かに多く、到底ここに收錄し切れないが、その型の傾向は東西の高低が一定的に反比例してゐるので頗る明瞭である。この外に少數の例外は免れない。例へば「鯛」、「菓子」は、東西ともにタイ、カシであり、「運」はウンである。

又漢語は東西が共通してゐる。例へば金・銀・印・心・狆・瓶、等々。關東型の第一音節の高いのは確然とした高型であるのに對し、關西のは上ると直ぐ折れ下る(4)調子をも合せて持つてゐる。從つて「極立て」は關西の方が弱い。關

東のは外來語に對しても自己の型を強いる傾向さへ持つてゐる。例へば basket, racket は關西ではバスケット、ラケットであるが、關東ではバスケット、ラケットである。

次に三音節語では、東京の「頭低く」型(即ち下上上及び下中中)が、京都では殆ど例外なしに「頭高か」型に變る。例へば、

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 明日 | アシタ | アシタ |
| 間 | アイダ | アイダ |
| 頭 | アタマ | アタマ |
| 家鴨 | アヒル | アヒル |
| 鼾 | イビキ | イビキ |
| 饂飩 | ウドン | ウドン |
| 大人 | オトナ | オトナ |
| 男 | オトコ | オトコ |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 女 | オンナ | オンナ |
| 鏡 | カガミ | カガミ |
| 仇 | カタキ | カタキ |
| 刀 | カタナ | カタナ |
| 四角 | シカク | シカク |
| 座敷 | ザシキ | ザシキ |
| 田植 | タウエ | タウエ |
| 俵 | タワラ | タワラ |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 力 | チカラ | チカラ |
| 堤 | ツツミ | ツツミ |
| 仲間 | ナカマ | ナカマ |
| 袴 | ハカマ | ハカマ |
| 話 | ハナシ | ハナシ |
| 東 | ヒガシ | ヒガシ |
| 役場 | ヤクバ | ヤクバ |
| 湯呑 | ユノミ | ユノミ |

東京の「頭高か」型は京都に於て正反對の「頭低く」型に變るものと、型は變らないで同じ「頭高か」型を有つてゐるものと二種に分れる。

〔東の「頭向か」→西の「頭低く」〕

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 合圖 | アイヅ | アイヅ |
| 親子 | オヤコ | オヤコ |
| 兜 | カブト | カブト |
| 今夜 | コンヤ | コンヤ |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 今度 | コンド | コンド |
| 榮螺 | サザエ | サザエ |
| 千鳥 | チドリ | チドリ |
| 野菊 | ノギク | ノギク |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 螢 | ホタル | ホタル |
| 紅葉 | モミヂ | モミヂ |
| 社 | ヤシロ | ヤシロ |
| 用意 | ヨーイ | ヨーイ |

〔東西が同型のもの〕

鮑(アワビ)、金魚(キンギョ)、去年(キョネン)、軍旗(グンキ)、姿(スガタ)、石榴(ザクロ)、忠義(チューギ)、天氣(テンキ)、火鉢(ヒバチ)、平生(フダン)、蜜柑(ミカン)、美事(ミゴト)、愉快(ユカイ)、等。

「中高か」の語は關東型の特徴であつて、關西型には之がない。東京人が京都人の言葉を聽いて伸びたやうに感じ、京都人が東京人の話を耳にして異樣の節廻しを覺えるのも、兩者のこの相違に基づくのである。これは三音節以上の各音節の「中高か」型に於ても同樣である。教育者が相互的に注目すべき點であらう。

それで、東京の「中高か(下中上)」型は京都でどうなるかと言ふに、これは二種類に分れて、「頭高か」又は「頭低く」になる。

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 朝日 | アサヒ | アサヒ |
| 繪本 | エホン | エホン |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 垣根 | カキネ | カキネ |
| 影繪 | カゲエ | カゲエ |

| 東京 | | 京都 |
|---|---|---|
| 心 | ココロ | ココロ |
| 米屋 | コメヤ | コメヤ |

| 關東（東京） | 關西（京都） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 一音節 | 二音節 | 三音節 | 四音節 | 五音節 | 六音節 |
| 1. 頭高か（へび型）¯\|＿＿ | _\|¯ | _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ |
| 2. 頭低く（もぐら型）_\|¯¯¯ | a ¯\|_ b ＿＿ | ¯\|_ | ¯\|_ | ¯\|_ | ¯\|_ | ¯\|_ |
| 3. 中高か（ねこ型）_\|¯\|_ | | | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ | a ¯\|_ b _\|¯ |

小麥　コムギ　　コムギ　　卵　タマゴ　　タマゴ
子猫　コネコ　　コネコ　　手本　テホン　　テホン
四方　シホウ　　シホウ

右の東西の關係に就いて何らかの法則が發見されたならば、非常に便利であらうが、これは尙、應用音聲學として今後の開拓に俟たねばならぬ。

尙、四音節以上の音節の型に就いての東西の比較は、三音節に於けると同様の事が言ひ得る。尤も三音節以上と言はず以下のものに就いても、多少の例外のある事は認めなければならぬ。例外語に就いては、又他の分類に依つて更に整理し得るものもあるが、これらに就いての詳論は他日の機會に讓る。

今、東西の型を圖式にして比較表を作ると上揭のやうである。

〔備考〕關東の一音節の語は、次の様に假定すると關西の事實上の二音節のものと對比する事が出來る。

| 關東（一音節） | 關西（二音節） |
|---|---|
| 上 ¯\|……（頭高か） | 下上 _\|¯ |
| 下 _\|¯……（頭低く） | a 上下 ¯\|_<br>b 下下 ＿＿ |

註 1　この二つの型は大正八年國語調査會の報告に據つて文部省普通學務局が「アクセントとは何か」で發表したものである。同書の前書き中に「…方言におけるアクセントは極めて概括的に見て、關東的と關西的との二樣に分けることが出來る。」

2　佐久間鼎「國語の發音とアクセント」一六一頁以下、同「日本音聲學」四〇七頁以下に詳しい。

3　神保格「國語音聲學」一五八頁。「文部省國語調査室で大正八年から始められた國語アクセント調査の結果ではアクセントに關する知識を世間に行き亘らせる必要上、上昇的の場合における上中下三段の區別を根本として認めつゝ之を平易簡易化するために實用に使ふ時二段の區別をすることにした。」尙、アクセント二段觀による平明なる解說は大西雅雄「國語の發音」七一頁以後にある。

4　この調子を佐久間博士は「上昇的なもの」と呼んで次に來る助詞との關係を認めてゐられる(「京都語におけるアクセント」音聲の研究第四輯)。服部四郞氏は「著しい下降的な姿」と述べてゐられる(「國語諸方言のアクセント概觀」方言創刊號)。そして、共にその所謂下上型を二種に分けて第二音節末が上り切りのものと、下るものとに區別してある。私もこの調子は認めるが、アクセントの「型」といふものの本質から、この「型」の二分には反對である。この二種なるものは、語固有の「型」以外の要素であつて、絕對的のものでないからである。「型」は依然として一つである。

# 第三章　單語篇

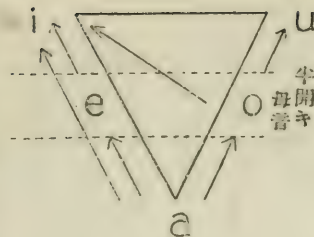
## 正音と音便

同じ標準語でも、前節に述べた通り範圍は極めて廣いから、その「音」には文獻的なもののと口語的なもののとの間に相違が出來てくる。言ひ換へると、文語的標準語と口語的標準語と

の間には著しい「音」の差違が出來てくるのである。

わが國語にして、もし音聲變化の歴史的原則が推し測られるならば、古語の音に對する研究ももつと〳〵進める事が出來ようし、更に又他國語との關係をも明かにする事が出來よう。五千年前の大和言葉は、その單音に於てだけでも今日のそれと可成りの相違があつたであらう。文字傳來以來の僅かな文獻中の現存するものに就いて見ても、考慮に價ひするものが少くない。これらの研究の總べてを所謂音韻學に任かせず——否任かせるにしても、音聲學的論據に立つて——更に科學的考證や實驗を築く事が大いに必要である。

かやうに歴史的研究が重要であると同時に、現代の國語が、その記述的なものから口述的なものに移る時に起る音聲變化の現象を整理して考へる事も大切である。これは所謂「音便」であるが、音聲學的に觀ると、その大部分は「長音化作用」であり、發音の「經濟化作用」である。

先づ母音に就いて言ふと、種々の「二重母音」が、その一方の母音又は双方の中間の母音（即ち半開き母音）を長音化したものに依つて代用される作用である。即ち

第一類　ai ──→ o:（e:）　　第二類　ae ──→ e:　　第三類　ao ──→ o:

第四類　ei ──→ e:　　第五類　oi ──→ o:　　第六類　ou ──→ o:

で、何れも「半開き母音」「e」又は「o」の長音「e:」「o:」に變る。實例を擧げると、

【第一類】（その一）〔ai ──→ o:〕

買ひて〔kaite〕→買うて〔ko:te〕　這ひて〔haite〕→這うて〔ho:te〕

逢ひて〔aite〕→逢うて〔o:te〕　舞ひて〔maite〕→舞うて〔mo:te〕

【第一類】(その二)〔ai→e:〕

咲いて〔saite〕→せーて〔se:te〕　焚いて〔taite〕→てーて〔te:te〕

抱いて〔daite〕→でーて〔de:te〕　書いて〔kaite〕→けーて〔ke:te〕

【第一類】(その一)は大阪邊の言葉であり、(その二)は東京邊の言葉である。

**附記** 「音便」の現象は動詞の語尾活用だけでなく語幹にも變化を及ぼす點に於て最早や舊文法家の領域ではない。敢て言へば「發音文法」又は「音聲語法」の分野であらう。

例へば　這いる〔hairu〕→へーる〔he:ru〕(第一類)　參いる〔mairu〕→めーる〔me:ru〕(同)

歸へる〔kaeru〕→けーる〔ke:ru〕(第二類)　加へる〔kuwaeru〕→くえーる〔kue:ru〕(同)

【第二類】〔ae→e:〕

歸へる〔kaeru〕→けーる〔ke:ru〕　冴へる〔saeru〕→せーる〔se:ru〕

絶える〔taeru〕→てーる〔te:ru〕　生える〔haeru〕→へーる〔he:ru〕

【第三類】〔ao→o:〕

仰ぐ〔aoŋu〕←おーぐ〔o:ŋu〕　扇ぐ〔aoŋu〕→おーぐ〔o:ŋu〕

【第四類】〔ei→e:〕

綺　麗〔kirei〕→ きれー〔kire:〕　丁　寧〔teinei〕→ てーねー〔te:ne:〕

敬　禮〔keirei〕→ けーれー〔ke:re:〕　命　令〔meirei〕→ めーれー〔me:re:〕

【第五類】〔oi → o:〕

問ひて〔toite〕→ 問うて〔to:te〕　乞ひて〔koite〕→ 乞ふて〔ko:te〕

醉ひて〔joite〕→ 醉ふて〔jo:te〕　添ひて〔soite〕→ 添ふて〔so:te〕

【第六類】〔ou → o:〕

誘　ふ〔sasou〕→ さそー〔saso:〕　通　ふ〔kajou〕→ かよー〔kajo:〕

思　ふ〔omou〕→ おもー〔omo:〕　問　ふ〔tou〕→ とー〔to:〕

右の外に、〔ie → e:〕例、「家」→「エー」と、〔uo → o:〕例、「魚」→「おー」の二類が強いて言へば認められるが、その實例は玆に擧げるもの位のものであるから、現存する形式としては、以上の六類である。

文法論の中では音便を分けて四音便（イ音便、ウ音便、撥音便、促音便）としてゐるが、これは文字形式から觀た常識論であつて、現象の眞髓に觸れたものではない。音便の解釋はどうしても音聲學に依らねばならぬと思ふ。「四つの音便」はその一半が前述の通り長母音化作用である。そして長母音化作用を分けて名付ければ、「e: 音便」「o: 音便」とでも言ふべきであらう。

「子音」の音便は長子音化作用、同化作用及び脫落が主なるものである。先づ長子音化作用から調べて見よう。

國語で「長子音」の現はれるのは、所謂「促音」の出來る時である。文部省の新讀本では小さな「つ」を以つて表記し、

ローマ字では子音文字を二つ重ねて、又はtを入れて（例へば「一丁目」—itchōme）表記し、音聲學協會の發音記號では右に一つ又は二つの點を打つ事になつてゐる。例へば、

さっし zasshi 〔dzaʃ:i〕　ラッパ rappa 〔rap:a〕　てっぽう teppo 〔tep:o:〕

一丁目 itchōme 〔it:ʃo:me〕

つまり、破裂音にしても、摩擦音にしても、その子音の完成に長い時間のかかつてゐる事を示すものである。「シ」とか「パ」とかの熟音は「sとi」「pとa」の連發から出來てゐるが、前音（子音）から後音（母音）に移るまでの間が長くかかるのである。

母音でも子音でも「長音化」する事は、後にも説くやうに、自らを際立たせて音聲効果を擧げるものである。それで、長音化されたものに隣接する「音」は時には省略されて仕舞つても、在つた時と同様に、或はそれよりも簡潔にして明白な音表示をする事がある。

長子音は、要するに、この音効果を利用して簡潔明白な音表示をしたものである。從つて、かうした言葉遣ひをする關東語（又はその類）に於てのみの特徴ある「音便」現象である。

【第一類】〔aite ⟶ at:e〕

買ひて〔kaite〕⟶ 買つて〔kat:e〕　綯ひて〔naite〕⟶ 綯つて〔nat:e〕

這ひて〔haite〕⟶ 這つて〔hat:e〕　舞ひて〔maite〕⟶ 舞つて〔mat:e〕

【第二類】 oite ⟶ ot:e

負ひて〔oite〕——→ 負つて〔ot:e〕　添ひて〔soite〕——→ 添つて〔sot:e〕

醉ひて〔joite〕——→ 醉つて〔jot:e〕　誘ひて〔sasoite〕——→ 誘つて〔sasot:e〕

【第三類】〔rite ——→ t:e〕

取りて〔torite〕——→ 取つて〔tot:e〕　有りて〔arite〕——→ 有つて〔at:e〕

釣りて〔tsurite〕——→ 釣つて〔tsut:e〕　擦りて〔surite〕——→ 擦つて〔sut:e〕

【第四類】〔tʃite ——→ t:e〕

立ちて〔tatʃite〕——→ 立つて〔tat:e〕　勝ちて〔katʃite〕——→ 勝つて〔kat:e〕

待ちて〔matʃite〕——→ 待つて〔mat:e〕

長子音化は以上の四類に分ける事が出來るが、その子音は何れも「t」である。それで、もし別稱するならば、「t:音便」と言つてもよい。

次に子音の「同化作用」を檢べて觀ると、これは所謂「撥音便」に當る。例へば

編みて〔amite〕——→ 編んで〔ande〕　飛びて〔tobite〕——→ 飛んで〔tonde〕

住みて〔sumite〕——→ 住んで〔sunde〕　飲みて〔nomite〕——→ 飲んで〔nonde〕

これは、最初兩脣音「M、B」が次に來る「T」の豫想で「N」に同化され、——特に「B」は一と先づ同じ調音點の「M」に變り、次で「N」に同化され——「N」と「T」とは同じ調音點だから母音「i」を脫落し、次で「T」は自ら作つた「N」のために有聲音に同化されて「D」となつたのである。（これなども文法家が語源的に解釋を加へようとしても、語幹そ

のものの音聲現象が及んでゐるから、それは徒勞に終らう。)

次に脫落作用であるが、これは次のやうに二分する事が便利である。

【第一類】〔前顎音脫落〕

tʃ ｛立ちて〔tatʃite〕 ⟶ 〔tatːe〕<br>勝ちて〔katʃite〕 ⟶ 〔katːe〕

ri ｛擦りて〔surite〕 ⟶ 〔sutːe〕<br>取りて〔torite〕 ⟶ 〔totːe〕

【第二類】〔後顎音脫落〕

ki ｛書きて〔kakite〕 ⟶ 〔kaite〕<br>燒きて〔jakite〕 ⟶ 〔jaite〕

ŋi ｛脫ぎて〔nuŋite〕 ⟶ 〔nuide〕<br>磨ぎて〔toŋite〕 ⟶ 〔toide〕

〔備考〕 有聲(通鼻)音〔ŋi〕の脫落では〔te〕が有聲音〔de〕に變はる。

「音便」は個人的と言ふよりは社會的であり地方的である。又、その純粹原理は國語に於て共通的價値を有つてゐる。これらの子音、母音變化の抽象的原則が、如何に個々の具體音に作用するかを考究する事は、又應用音聲學の重い任務の一つでなければならぬ。

## 第四章　文　章　篇

**話述の要件**

以上の「單音篇」に於ては個々の音の發音上の正確を期し「單語篇」に於ては連音構成上の要件を說いた。本章に於てはこれらが「文章」として且つ口述上に活用されるに當つて、肝要とす

る諸條件に進まねばならぬ。

(1)近代的意味に於ける「話述」は、所謂「雄辯術」、「朗讀術」、又は「藝術讀み」、その他次章に說く如き「特殊の諸相」を指すものではなく、極めて狹義に明朗と自然とを體とした口述の調子と言つてよからう。私は所謂「朗讀」と區別するために敢て「話述」といふ語を用ひる事にする。

その文體から言ふと、文語體よりは言文一致體が適し、更に又、「である」口調よりは「だ」口調、又は「です」口調が適してゐると言ひ得る。從つて、時代から言へば德川時代の文章よりは明治時代の文がよく、更に大正・昭和のものが一層、現代人の話述材料に適する事になる。假りに奈良朝・平安朝のものを朗讀して見ても、その發音や音調等は結局現代への飜案に過ぎないであらう。これを藝術的に創作し表現して見る仕事は次章に讓るとして、本章では狹義に、現代人の活用語の正しき話述に於ける必要條件を問題にする。

今、話述の要件を便宜上客觀的、物理的に擧げると、次の四つになる。

(1) 高低(高さ) Pitch　(2) 强弱(强さ) Force　(3) 緩急(速さ) Tempo　(4) 休止(休み) Pause

處で又、これらを表現された結果に基づいて他の性質方面から觀直すと、要するに右の四要件は言葉を「明瞭にすること」「强調すること」の二つになる。言ひ換へると、「極立てること」と、「誇張すること」の二つになる。或はこれ(2)を「卓立」と「擴充」とに呼んでもよい。それでこの二つを表現形式から拔き去ると、殘るものは所謂「伸べよみ」「棒よみ」又は「兎獲よみ」とでも言ふべき單調なものになつて仕舞ふ。

私は、以下に前揭の四項目を總べてこの二つの性質の立場から觀て行かうと思ふのである。

１　高低　これは一名「調子」である。音響學的には音波の振動數の多少、又は波長の長短である。音の聞える範圍[三]は振動數十六から三萬位までの間であるが、人間の發し得るのはその内で一二八から二、〇四八までの振動數とされてゐる。しかし、これとても一個人の發し得るものではなく、最低聲の男聲から最高聲の女聲に至るまでを引くるめた範圍である。

斯樣な多種多樣な音の高低の相違は、人間の肉耳を以つて總べてを判別する事は到底不可能である。音樂專門家にしても、多くの場合、相對的に高低を知覺してゐるのであるが日常用ひる言語としての「高低」は、寧ろ「調子」と云ふ柔らかい語が適するやうに、「昇る」（↗）、「降る」（↘）、又は「平ら」（→）くらゐの二種乃至三種である。[七]更に特別の場合に、「極く昇る」（↑）、「極く降る」（↓）の二種を追加してもよからう。

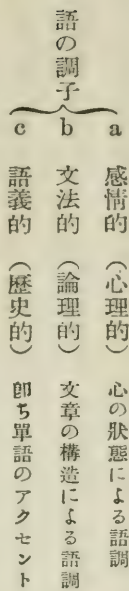
さて、話述の要件には横に亙く二つの大きな性質のある事を前に述べたが、「高低」に於てはどう言ふ關係にあるか。先づ應用音聲學に謂ふ「高」「低」及び「平」の意味から說くと、音響學で問題にする振動數の絕對觀に對して、こちらは常に甲乙比較による相對觀である。卽ち、「高い」と言ふも「低い」と呼ぶも、一個人の二つ又は二つ以上の音の並んだ時の對照に過ぎない。更に、嚴密な條件を追加すると一個人が、或る特定の時に、或る特定の必要に依つて發した單語又は文章中に於ての各音の相對的高低である。

例へば、甲と云ふ男が「アア、キョオワ　サムイ」と言つた時に、「アア」と「キョ」と「ム」の音がその他の音に比べて高い時に、概括して「高い」といふのであつて、「アア」と「キョ」と「ム」との振動數の相違までは問題にしない。又、右の文句を同一の人が机に向つてゐて發した時と、戸外に飛び出した時に發したのとがたとへ文全體的に調子の高さが

違つてゐても、その高い音の配置に變りのない限り同一と看做すのである。又、同じ文句を甲なる男と、乙なる女とが發した文全體の高低の相違も問題にしない。この點は個人の高低の型に依る絶對觀で、多數の人々の振動數に依る横斷的相對觀ではない。

それで「平調」は一個人が平靜な時に發する普通の音に對する高さと見てよい。これに比べて、或は「高く」、或は「低く」なるのは如何なる原因により、又如何なる結果を齎してゐるかと云ふ事が研究題目になる。

先づ調子が高くなり低くなる原因に就いて觀るに、これには三つの場合がある。(5) 佐久間博士は感情的語調・論理的語調・語系的又は歴史的語調に分けてゐられる。これを整理して見ると、次のやうになる。

語の調子
- a　感情的　（心理的）　心の狀態による語調
- b　文法的　（論理的）　文章の構造による語調
- c　語義的　（歴史的）　卽ち單語のアクセント

(a)は、話す環境によつて心理的に高低が出來る。例へば、驚き・怒り・喜び、等は調子を高くし、絶望・悲歎・悔恨、等に聲を落す。又、環境の如何に拘はらず話手の氣質による事も併せて一つの原因となる。けれどもこれらの結果を、音聲効果の性質から分けると、調子の「高く」なる場合は「極立て」であり、反對に調子の「低く」なる場合は「誇張」である。前者は感情を或る一點に於て他の部分よりも卓立して表示する作用であり、後者は感情を一層深刻に、擴充して傳達する作用と觀ることが出來る。例へば、

**耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。**

の文は、命の助かつた歡喜を披歷するのであるから、明かに「高い」調子でなくてはならぬ。これをもし「低い」調子で唱へたならば、よし「誠意」は傳はつても「歡喜」の情は表はれない事になる。即ち前者は「極立て」の効果であり後者は「誇張」によるのである。又、例へば、

武運もこれまでだ。いざ覺悟しよう。

の文は、絶望を示すものであるから、「低い」調子でなくてはならぬ。これをもし「高い」調子で讀んでは絶望の感情は表はれない。即ち絶望は低調を通じて意義の傳達に誇張作用・擴充作用、又は強調作用、が行はれる事によつて、一層深刻に有効化する事が出來るのである。

(b)の場合は、多く(a)の場合と關聯するが、主として敍述形式による文法的原因を持つて居る。例へば、疑問文の或る個所の調子を「高く」する事は、その疑問文であることを、或はその文中の疑問の趣旨のある個所を、明示する爲めの「極立て」作用である。又、肯定文などに於て、或る個所に調子が「低」められることは、肯定の調子が誇張され、擴大されることになる、但し、調子は或る程度以下に「低め」られると、それ以上は次項に說く「強弱」中の「強」の力を借りて、「誇張」の「極立て」が復式に行はれるものである。例を揭げると、

1 〔疑問詞のある時〕

「なぜ」又は「なぜ泣くんです」　「どこ」又は「どこへ行くんです」　「いつ」又は「いつ來ます」

「どう」又は「どう思ひます」　「だれ」又は「だれが言ひました」

2 〔疑問詞のない時〕

「もう　歸ります」　「では　この次は」　「また　おいでになりませう」　「これをあの人に」又は
「あの人にこれを」　「アメリカから」

形容詞が幾つも竝ぶ時は、名詞の直ぐ前の形容詞が最も「高い」調子を取つて、その語と次の名詞との關係を「極立」たせる働きをする。例へば

「私の　好きな　小さな　人形」　「お庭の　白い　大きな　朝顔」

又、比喩の語には、その中の主要な語に「極立て」が行はれる。例へば、

「彼のまぶたにつゆ(涙)ありき」　「まるで　天國の　やうだ」　「響といへば槌」

又、文章の最初においた呼掛語には高調が用ひられる。

「太郎　こちらへいらつしやい」

これに反して、呼掛語を後においた時は　「こちらへいらつしやい、太郎」である。

その他、特定の句を明示する必要のある時には次項の「強さ」をも作つて、一層有効な「極立て」作用が行はれる。

次に、調子が「低め」られる事は「誇張」の結果を齎らす。肯定文とか、誓約文とか、命令文とか數個の名詞の竝んだ最後などには、低調が用ひられて、肯定、又は斷言の意を強調し、擴充する事になる。例へば、

「それは　私のです」　「きつと　參ります」　「そこへ　這入つてはなりません」
「一、二、三、四、五、六、七」　「柿と、梨と、リンゴ」

これらの「誇張」法は、更に強められると低調の上へ次項の「強め」を取つて複式に「誇張」の「極立て」をする事になる。

例へば、

甲、さうだ ……「誇張」

乙、さうだ！ ……強い「誇張」

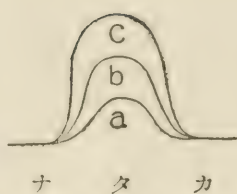
丙、さうだ！！ ……強い「誇張」の「極立て」

(c)の語義的の場合は、第一が語そのものが保有してゐる所謂「アクセント」である。國語では調子が音響學的に高低する點に於て、これも明かに一種の「調子」であり、又、大切な話述要素である。「アクセント」の相對性に就ては既に述べたが、その「極立て」及び「誇張」の自由を有する事は次の如き實驗をすれば分る。

c b a

カ タ ナ

即ち、上圖に示す「カタナ」なる語のアクセント型は中高かであるが「タ」の高さは時に應じてa、b、c、何れをも取り得る。

この際bはaよりも、cはbよりも「極立て」られた音聲効果を持つ事になる。反對に或る音節を特に低調にして「誇張」の効果を表はす事もあり得る。例へば、「ウシヲ」、「ヒトヲ」等の助辭を特に低くするとこれを「誇張」する事になる。一層甚だしく低めやうとする時は、更に「強」を伴つて「誇張」の「極立て」となる事も前述の通りである。

語義的高低の第二の場合としては、純粹に語義から來る高調の語、低調の語の別である。第一のアクセントの場合を語の「型」と呼ぶならば、第二の場合のは語の「質」と言ふことが出來よう。即ち、「ことば」は型の外にその意義に應じて概して高い調子をもつて發音せられるものと、反對に低い調子に發せられるものとを認め得ると思ふ。例へば、

【高調の語】

〔陽快なもの〕―萬歳、歡迎、美麗、誕生、新年、唱歌、蓄音器、

〔生物の名前〕――オトーサン、オカーサン、タロー、ハナコ、キク、バラ、サクラ、

〔高い幼兒聲〕――チュンチュン、ニャーニャ、オンマ、ポッポ、マンマ、

〔高い擬音〕――ピー、ピリピリ、カーン、チーン、

【低調の語】

〔陰鬱な語〕――病人、葬式、墓場、刑務所、死刑、曇天、懺悔、

〔無生物の名前〕――水、山、土、木、船、石炭、家、鏡、筆、机、

〔低い擬音〕――ザーザー、ゴーゴー、ゴロゴロ、ブー、

2 **強弱** これは普通に言ふ聲の大小又は聲量である。音響學的に言ふと音波の振幅の大小であり、波の濃さの變化の大小である。音樂では普通「強・中・弱」の三種に分けて用ひてゐる。

強弱にも大人と子供、男と女と、等に依つて個人的相違はあるが、或る特定の事實に對して發する言葉の中の強弱の關係を各個人に就いて調べて、その形式を抽象して見る事は不可能ではない。

強弱の原因も、高低と同樣にa感情的、b文法的、c語義的に分ける事が出來る、例へば興奮・激怒・叱責、等が強く、謝罪・懺悔・歎願等が弱いのはaであり、命令・禁止等の動詞が強く、疑問・推量、等の助辭の弱いのはbである。cは我國語ではアクセント型としては認められないが、語の「質」としては認められない事もない。

させて、强弱の現象を結果から觀ると、「强」は「極立て」で、「弱」は「誇張」である。常識的に考へると「强」が「誇張」のやうであるが、本論で言ふ「誇張」の意義は音響學的な絶對値の大小ではない。言語傳達の効果に於ける相對的の問題である。例へば或る人が聲を普通よりも張り上げてものを言ひ、次で普通よりも聲を落して、或は聲をしのばせて、ものを言つたとすれば、先のは「極立て」たのであつて、後のは「誇張」したのである。例へば百雷の音を眞似るにしても、眞に大きい聲を出すよりは、寧ろ反對に低い、强い、そして長い音を以つて表はす方が効果的である。即ち「誇張」の効果を用ひるのである。

之らの言語材料は、同一のものが「極立て」と「誇張」とに兩用される事もあれば、全然別種ものに限るのもある。前者は感情的原因の加はり得る條件の時で、例へば興奮し易い氣質の人が通常の事を發表する時に大聲を出す如きである。後者は文法的又は論理的に叶つたもので、之には各人に共通し得る一定の型とも言ふべきものがある。例へば、

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 强 | コラッ！ | （叱責） | 弱 | 御免なさい | （謝罪） |
| | トマレ！ | （命令） | | お願ひです | （哀願） |
| | ダレダッ！ | （問責） | | いいえ | （否定） |

語氣的に强弱を定めるものでアクセントの型をなしてゐるものは英佛獨語の如きであるが、我國のは强弱でなく高低である。「貴」の方から見て强弱の種別を立てると次の如きである。

【强い語】

〔漢字の音〕――堅固、强烈、敏活、勉勵、實行、

〔強い擬音〕――ドーン、ガンガン、ゴロゴロ、ゴツゴツ、ドヤドヤ、

【弱い語】

〔國字の音〕――かたい、つよい、はしこい、つとめる、おこなふ、

〔弱い擬音〕――ソヨソヨ、スー、ボツリボツリ、シー、

3 **緩急** 二つ以上の音の連續したものの速度を取上げて言ふ時は「緩急」と呼ぶのがよく、その一つ一つの音に就て問題にする時は「長短」が適してゐる。音樂では前者は速度の相對的表示であり、後者は絶對的表示と看做してゐる。即ち「緩急」は「非常に遲く」・「遲く」・「稍遲く」・「中庸に」・「稍速く」・「速く」・「極めて速く」・「出來るだけ速く」などと主觀的の分け方であり、「長短」は拍節器(メトロノーム)の振動數測定に依つて、全音符・二分音符・四分音符・等を決定してゐる。

音聲學の表記は普通「長短」だけで、それも長・半長・短の三種くらゐに分けてゐる。應用音聲學で緩急を分けるとすれば、之も急・中・緩の三種くらゐが適當であらう。

緩急を決定する原因にも矢張り、心理的・論理的・語義的の三つがある。又、結果から見ると前項の通り「極立て」と「誇張」との二つがある。

感情が切迫し緊張した時はその表現は急で、その音聲効果は「極立て」である。その反對の場合で、感情の平穩冷靜の場合のは緩であり、この度合の進む事に依つて音聲効果は「誇張」又は「强調」を來たす事になる。論理的の方面から見ても、急な場合は「極立て」の効果を擧げ、緩の場合は「誇張」の役目を果す事になる。例へば、

【急】〔心理的〕

「危い、危い！　こちらへ逃げなさい」。　　「逢ひます、逢ひます、私ぢやありません」。

【急】〔論理的〕

「王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて、次女リガンの許に走つた。ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚なすさまじく見せて、ぴかりと雷が光る。」

これらは皆「急」であると同時に「高」で、又「強」である。しかも音聲効果的に見ても少しも誇張ではなく、極立てである。前者が主觀的であるに對し、後者は客觀的である所が、大體心理的と論理的との分れ目であるが、兩者とも各種々の場合があり、又兩者の交錯したものもあるから、實際文に就いてはかく單純に扱ふ事は出來ない。

一方、「緩」の場合は、心理的には畏敬・莊重・歎願・懺悔・等の時が多く、論理的には儀式文・宣言文・公演文・等が多く、何れもその結果は「誇張」である。

次に語彙に就いては、或る程度まで型を見る事が出來る。例へば次の如きはその條件の一斑である。

【急調の語】

〔重　句〕——シロイ〳〵、ナガイ〳〵、タカイ〳〵、ボカ〳〵、ドカ〳〵、

〔早　言〕——滅相もない、飛んでもない、いやはや、あれやこれや、

〔略　語〕——モチ（勿論）、ターさん（武田さん）、社民（社會民衆黨）、澤正（澤田正二郎）、エノケン（榎本健一）、早慶戰、

**【緩調の語】**

（長母音）——シーローイ、ナーガーイ、マルーイ、コイー、ヨーシ、

（長子音）——サッキ、ヤッパリ（シ）、トッテモ、アッカイ、デッカイ、チッチャイ、

（通鼻音）——タンビ（度）、ヤンワリ、オンナジ、ダンマリ、フンワリ、

「急」は前述の通り「極立て」の作用をし、「緩」は「誇張」の働きをしてゐる。玆に面白いのは、同じ「白い」が、「シロイノ」と「シーローイ」とで、音聲効果の性質が全然異ることである。前者は短音（又は最短音）の集りであり、後者は長音（又は最長音）の連續であるが、短かい方では「高」と「强」とを伴ふのが通則であり、長い方では「低」と「弱」とを伴ふのが自然である。そこで、前者は「極立て」となり、後者は「誇張」となる。前者は寧ろ近畿方言の性質を持つた表現法であつて、東京人が用ひる場合の「重句」とは内意が違つてゐる。

4　**休止**　休止は普通「ポーズ」と呼ばれてゐるもので、音聲の完全な斷絶である。文章の途中に於て、即ち一定の語句と語句との間に於て、前の音が次の音の發せられるまで引伸ばされるのではなく、完全に打切るのである。そして、その打切り方が、普通の單語と單語との間よりも比較的長い時を名付けて「休止」と言ふ。

休止を便宜上、その長さから大別すると、「全休止」と「半休止」とになる。前者は文の終り、即ち文と文との間で、後者は多くの場合、句と句又は語と語との間である。

休止のおかれる自然の位置は、息の繼ぎ目、（又は息の段落）であるが、「誇張」の用に使はれる時は、息の繼目以外に於ても屢〻おかれる。

休止の音樂的効果も矢張り「極立て」と「誇張」とであるが、前者は息の段落のあるべき個所に全然「無休止」をし、後者は息の段落の無い所へ「休止」をおくか、又は息の段落はあるが「半休止」であるべき所へ「全休止」或は「更に大きい全休止」を入れる事によつて行はれる。そして、「極立て」の時は「高」「強」「急」の諸條件が附隨し、「誇張」の時は、「低」「弱」「緩」の調子が伴ふのが普通である。尤も、これらの條件は心理的及び論理的の内容に依つて律せらるべき更に詳細なる事情が伴ふから、一概に全文の調子と云ふ事は出來ない。或時は條件の一つを缺き、又或時は條件の二つを缺く事もある。又更に、「極立て」の部分と、「誇張」の部分とを混へた文さへ少くない。

「休止」に就ては、心理的・論理的に分けて實例を擧げる事は困難であるし、又語彙に就いては型らしいものの在る事さへ見出し得ない。たゞ、文の形式から、即ち文法的に、これを識別する事が出來る。例へば「無休」の場合は、

【引用句】

……「議員にして善かつ義なるヨセフといふ人あり、」……

【格言】

「業あれば害あり」　「蒔かぬ種子は生えぬ」

引用句や、格言などが、文全體から言へば部分的に「無休」の形で讀み上げられる事に依つて、他の部分から一段と「極立て」させると言ふ音聲効果を齎してゐる。これをもし他の「休止」による形式で讀んだならば、その結果は主觀的であり、直觀的になる。從つて、「極立て」ではなく「誇張」の型に變つて仕舞ふ。この際は、必ずや「高低」「強弱」「急緩」の條件に於ても不自然な錯誤を來たしてゐる。眞の文意を辨へない朗讀者の内に、多くこの種の誤りを發見する。

次に「休止」は次の如き文體に於て、固定した型を認める事が出來る。

【直敍文】（呼び掛語・感歎詞・等）

「奥樣 < あのとよは」　「おとうさん < こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう」

「嗚呼忠臣 < 楠子之墓」　「あゝ〳〵 < 兵吉はこれからどうして日を過すだらうか」

【文意上】（引用句の仕切り・句文の轉位・特に極立てる句）

「いつも人より一時前に參つて居ります」「一時も前に」< といつて信長は驚いた」

「誰だ < 第一に上陸したのは」　「我を生み < 我を養ひ < 我を敎へた父母」

【韻　文】（韻律文・俳句・和歌）

「赤松の林をあとに < 麻畠ひだりにみつゝ < 汽車は今堤にかゝる << ほのかなる水のにほひに < 河淀の近さは著るし <<」（五七調）

「ゆきてとらへよ大麥の < 畠にかくるる小兎を < われらがつくる麥畑の < 青くさかりとなるものを < たわにみのりし穗のかげを < みだすはたれのたはむれぞ <<」（七五調）

凡そ「休止」は次に來る語を誇張する力をもつてゐる。次の語は多くの場合は、「低」「弱」「緩」の條件を備へてゐるが、その前の「休止」が長ければ長いほど、「誇張」の効果を表はし、「強調」の力を示すことになる。反對に「休止」が短かければ「誇張」の力は減少する。更に進んで「休止」が皆無になると、後の語には自然と「高」「強」「急」の調子を帶びて來て、効果は「極立て」に變はる。

それで、言葉遣ひを極度に誇張するか、又は發音に要するエネルギーが普通以上に節約される――か又は不足するかの――時は、「休止」が頻繁になるが、しかも強調は充分に保有される事になる。それらは、例へば非常に様子振つて話す人とか、疲勞や苦痛を覺えてゐる人の話し振りに於て觀る事が出來る。

韻文に於ては、効果の性質を決定するのに、「休止」を主としたものと、「高低」を主としたものとがあると思ふ。

a 高調を主としたもの、三二調・五三調・七五調、等（極立て）
b 休止を主としたもの、二三調・三五調・五七調、等（誇張）

aは後の句が輕くて連續性を有し、調子を高め得るものであるから、その効果は「極立て」であり、bは後の句が重くて停止の機能を有し、澁滯を發生する。それで後の句は「誇張」の効果を現はす事になる。茲にはこれに就いての尚幾多の詳論を省略するが、右が詩論に於ける韻律の性質に對する音聲學的の根本的答案でないかと私は信じてゐる。

| 要件 | 性質 | |
|---|---|---|
| | 極立て | 誇張 |
| 調子 | 高 | 低 |
| 強勢 | 強 | 弱 |
| 速度 | 急 | 緩 |
| 句讀 | 無休 | 休 |

尚ほ、詩歌の朗詠には「高低」「強弱」「急緩」の組合せに於て、又それぞれの割合に依つて朗詠者の個性が現はれ、一見千種萬別のやうでもあるが、大別すれば矢張り、「極立て」の量と、「誇張」の量との對比であると思ふ。概括的に言へば短歌は元來、「誇張」型であり、俳句はどちらかと云へば「極立て」型である。兩者が多少とも、その含む要素の度合を變へる事に依つて、朗詠者の個性を生み出すものと言へよう。

以上、話述の要件を概說して來たが、之をまとめて一つの表にして示すと、その關係は上記のやうになる。應用音聲學としては、これらの各項、又はその相互關係に就て、

實際的に尚多くの研究分野を有つてゐる。

註 1 日下部重太郎「朗讀法精説」(五頁)「言語文章を正しく且つ趣味あるやうに、言ひ表はし又は讀みあげる術である。」曾保格「話言葉と音樂との區別」(教育・國語教育」昭八・九・臨時號)「自然の言葉と同じ性質をもち而も有効なる話方又は讀方の道が述べられてゐる。

2 「卓立」なる語は服部四郎氏が「誇張」と並べて用ひてゐられる(本講座第三回、「アクセントと方言」(一三頁)。右は H. O.Coleman の "Intonation and Emphasis" にヒントを得られた由であるが、國語にこれを當て嵌めた點は着目すべきである。

筆者は自著「國語の發音」(昭和六年)に於てアクセントを「極立て」と認め、又「音聲効果」の一作用と説いておいた。「音聲効果」はアクセントに限らず表現法全般に關する問題であるが、筆者は未だこの種の發表あるを見ない。又自ら卑見を纏めるのも之が初めての機會である。

3 田邊尚雄「音樂の原理」(二四七頁)

4 パーマ氏 (H. E. Palmer) は A New Classification of English Tones に於て、氏の從來の記號 ( English Intonation" 及び "A Grammar of Spoken English ) を訂正して下の如き實用的分類を擧げてゐる。

1 'Cascade" pattern (瀧型「 又は 　2 "Dive" pattern (潜り型)

3 "Ski-jump" pattern (スキー飛び型) 　4 "Wave" pattern (波型) 又は

5 'Snake" pattern (蛇型) 又は 　6. "Swan" pattern (白鳥型)

5 「日本音聲學」(三三五―三三六頁)

## 言語表現の諸相

言語の發表傳達の方法は廣く言へば、口述の外の記述（文字・暗號）・信號・身振・手眞似等、種々あるが、音聲學で扱ふ範圍は、言ふ迄もなく「音聲」によるものに限るのであるから、狭義の純粋言語だけである。

この純粋言語を、便宜上、發表される狀態から大別すると、何等の支障なく言語訓練を完成したものと、何等かの理由で言語訓練が未完成のものとになる。謂はば前者は「正常の話し手」であり、後者は「特殊の話し手」である。前者に就いては「より完全なる、又は、より有効なる、或は又、より標準的なる」話し方に進む事を目標とし、又、後者に對しては「何とかして少しも早く正常な話し手に、少くとも正常に近いもの、それとも又幾らかでも今日の特殊狀態を脱出する」やうに指針を示すのが、應用音聲學としての職分である。本章に於てはこれらに對して、ほんの概説を示すに留まるが、その實際に就いては今後の各論研究に俟たねばならぬ。

**A　正常の諸相**　言語の正常な話し手に依つて行はれる發表方法には、その最も通常態である「語述」の外に、更に複雑なる音聲學的要素が加へられて種々の表現相を生み出す事になる。言語はもともと個人と個人又は數人とが「對話」する事、或は個人が獨白する事に初まつたものである。處が、これが次第に多數の前で表現する必要を生じ、同時に文學から「朗讀」し、又は「朗誦」する事になり、次で宗教その他の儀式等の必要から「ふし讀み」をする事となり、更に發達して歌謡を生み出す事になつた。要するに、これ等は言語表現の大衆化であり、形式化であり、藝術化である。

今假りにこれらの諸相を一覽表にして見ると次のやうである。

**第一類**　「語　述　態」——獨白・對話・談話・噺家

文　章　篇

**第二類** 〔演 說 態〕——說話・講演・演說・切口上・演劇

**第三類** 〔節 讀 態〕——寢轉びよみ・讀經・祝詞・詩吟・朗詠

**第四類** 〔歌 謠 態〕——話し歌・オラトリオ・歌劇・唱歌・童謠・民謠・長唄

右の內で、〔話述態〕は前節に於て述べた通り最も自然的な發表形式である。これよりも單純になると「棒よみ式」話述で音聲効果は劣り、又これよりも複雜化する事は演說態となつて標準的話述の態度を失ふ事になる。言語傳達で最も自然的で又一般的な表現法としては第一類である。又その內で最も効果的ならしめる爲めの要素に就いても既に述べた。

話述態の內で、「獨白」は相手なくして相手があるかのやうに話述の氣分を滿喫するものであり、「對話」は二人の差し向ひで忌憚なく感情を含め、論理を通し語義を生かせて、交互に表現し合ふものである。一名「會話」とも言ふ。「談話」は二名以上の會合に於て、或る一人が他の人々に聽かせる形式で話すものをいふ。その調子は「對話」と殆ど似てゐるが、聽き手が多いだけ稍〻油が乘つた調子であるが、なほ自然の調子は失はない。次の「噺家」口調は話述態の內では最も効果的ではあるが、調子が碎けるだけにやや誇張があり、自然味が幾らか削られる。これは高低・強弱・緩急・休無休を巧みに繰る所に音聲効果は大いに發揮され、一種の快味を伴ふ故に、「話述態」の域に於ける最高の藝術態であるとも言ひ得る。

話述態の各相は、思ひ付くまゝに述べ得ると同時に書きものから朗讀する事も、又それを朗誦する事も出來る。これは新しい廣い意味での「朗讀」であり、筆者の狹い意味での「話述」である。

第二類の「演説態」は、最初から多數の人々を既定の聽き手として、話し手は一段の優越した立場にあつて聽き手を教示し、説服し、追從せしめる。從つて、その表現の方法には一種の强みがあり所謂誇張がある。「高き」は徒らに高く、「低き」は徒らに低く、「强き」は遙かに强く、「弱き」は遙かに弱い。又「緩き」は大いに緩く、「急」なるは大いに急である。卽ち、「極立て」と「誇張」の兩者を著しく極端に使用するのである。前の話述態が極端にまでは達しないで双方を相當に用ひ、又巧みに轉換してゐる柔かみと、異なる所である。

演説態は休止が屢々現はれ、又明瞭である。そして休止の前には大きな「强調」がある。國語の肯定文の文尾は普通「低調」であると同時に「弱勢」であるが、演説態に於ては、これらにも「高調」や「强勢」がおかれる事も少くない。「しかし」「そこで」「從つて」「また」「が」「で」などの如き接續詞や助辭にまで、强勢の用ひられる事も少くない。總べての調子が高く、强く、そして高い。從つて、その用語にも、話述態には國文、國語體が普通であるが、演説態には漢文・文語體が多く挿まれる。

「説話」の部類には、説教・訓話、なども這入る。目下のものに對して行ふ形式であるから、調子が概して强い。

「講演」も「演説」も共に大衆を相手として話し手の意見を述べるのであるが、前者は、説服しようとする力が後者よりも弱い。けれども大衆に行き亙らせようとする所に、高さと强さと緩やかさとがあり、息の段落（休止）も多い。從つて全體の調子に「極立て」と「誇張」がある。講演の内には教壇・公會堂・ラヂオ放送室などそれぞれの趣きを有つたものがある。前の二つは聽き手の姿も數も眼前に觀取出來るから口調の調整が容易である。然るに、「ラヂオ放送」では相手の種類も數も不明である所から、調整を誤まる人が少くない。特に六かしいのは「强弱」と「緩急」の要素であ

う。「強弱」は放送局に於て多少は加減してゐるとは言へ、極端に語尾の不明瞭なもの、反對に張り上げ過ぎて噪音を聽かせる如きものは困る。「緩急」の宜しきを得ないものは全く、技術部に於ても調節の方法がない。三十分の講演に早い人は二十三四枚の原稿紙(四百字詰)を讀み上げ、遲い人は十四五枚であるといふ。學術講演などで、二十枚を出るものは、もし一般的發聲法でも悪かつたならば、要を得ない個所が少くない。又、十四五枚程度になると、母音延長が過ぎ、休止も多過ぎ、他の不要な挿入音、例へば、「えー」「あー」「そのー」等が頻出する事になる。放送に當つて草稿を讀上げると固くなり、素手で話すと冗長になり勝ちである。三十分の放送に原稿紙十八九枚を、草稿のあるなしに拘らず、「話述態」を離れず行ひ得るならば理想的であらう。尚、「演説」の内には「討論」といふのを含むが、これなどは全く固い、強い感じを與へるので、恐らく、「演説態」又は「演説口調」の代表的なものであらう。

「切口上」といふのは、「休止」が屢〻あつて何れも急激の斷絶で甚だ短く、従つて、「休止」の前の調子は低くならないで反對に高まる。話述の自然性といふ點から觀ると、著しく不自然で、寧ろ異様の感を與へる。

「演劇」といつても綜合的藝術で何處を指すのか明かでないが、「せりふ」だけに就て言へば、現代劇の或るものは頗る柔かで第一類「話述態」に這入るべく、古典劇中のものは第二類に屬すると言へよう。双方とも「極立て」と「誇張」の要素を著しく生かせるのが特徴である。しかし、些細に點検すれば、標準音と方音の使ひ分けの出來てないもの、東西の言葉をその正しきアクセントに當嵌め得ないもの、言葉の主眼點に於ける音調を履違へてゐるもの、等々が少くない。歌舞伎のやうに、言葉使ひに音樂的の「型」を備へてゐて民衆化されてゐるものは、その當否が直ちに分るから藝のよしあしも明瞭であるが、新派劇わけても飜譯劇などに於ては脚本の無理に加へて表現の自由性から、よしあ

しの鑑別も一律には行かない。これが演出に當つては、演技者の音聲効果の研究と同時に、脚本家の話述法研究も併行されねばなるまい。

第二類の「節讀態」は、確定的に作成された文章に準據して行ふものであるから、表現の途中で表現者が内容上に自由裁量を加へる事は出來ない。從つて、述べる意圖は少しもなく「誦する」ことに終始してゐる。この點は第一類と根本的に異なる所である。尤も第二類中にも「切口上」や「演劇（せりふ）」は事實は既成の文章に據つてゐる。けれども、その表現形式に於ては、少くとも自由裁量で主觀的に言語内容を發してゐるかの如く見せかけねばならぬ。然るに第三類に於ては、その技巧は少しも要らないで、たゞ忠實に文章を追ふて行けばよい。

第三類を「話述の要件」の見地から嚴密に言ふと、これを二分する必要がある。即ち「寢ころび讀み」「讀經」「祝詞」の純「ふし讀み態」であるのに對し、「詩吟」「朗詠」「謠曲」又は「琵琶歌」や「浪花節」などの地歌は、寧ろ第二類の進化したものと見るべきであらう。各「態」の進化した關係を圖示すると、

尚、藝術的進化の跡を觀ると、甲・乙・丙の三者は殆ど同じ時代に併行して發達し、夙に古代印度・埃及・希臘・羅馬に始まつてゐる。これらは所謂廣義の朗詠時代で西暦千六百年頃まで續いてゐる。この頃から伊太利歌劇が出現して著しい唱歌法を創出して丁の歌謠時代に這入つて今日に至つた。わが國に於ても、「節讀み」は比較的早く奈良朝時代であるが、「吟誦」はせいぜい平安朝時代であり、義太夫を初め一切の「歌謠」らしいものは皆江戸時代以後から明治に

かけてであつた。

「節讀態」のうちで、乙に屬するものは音調から言ふと、「話述態」から直接發達したものであり、丙に屬するものは「演説態」を經て延長したものと見るべきであらう。即ち、「寢ころびよみ」や「讀經」には「高低」「强弱」「緩急」の變化に缺け、謂はゆる一本調子であり、從つて「極立て」のための張りも乏しく、「誇張」のための强勢や「休止」もない。

| | 「はなし」 | 「うた」 |
|---|---|---|
| 空氣使用の量 | 平靜の呼吸におけるよりもほゞ二〇―三〇%だけ少い。 | 平靜な呼吸よりも著しく多い。 |
| 調子 | 調子の範圍は五度から六度で、調子の變り方は連續的にすべつて行く。急に變る事もある。 | 調子の範圍は全聲域にわたる。調子の變り方は固定した音程により、連續的にはならない。 |
| 母音の長さ | 母音の長さが變つて行き一體に短い。言葉調子やリズムは、意味やアクセント法則に規定される。 | 母音の長さが一體に長い。旋律とリズムとは音樂的(音響學的)法則に規定される。 |
| 著しさ | 子音が著しく耳だつ、音節やアクセント小節がむしろ一單位となつて固まつてゐる。 | 母音が著しく現はれて往往子音を蔽ひかくす。 |

一方「詩吟」や「朗詠」に於ては張りも落しも、强めも弱めも充分である。謠曲・琵琶歌・浪花節・義太夫などには歌謠調も多分に含まれてゐるが、固定した音程を備へてない點に於ても、科學的發聲法に則らない點に於ても、その音調は第三類の「節讀態」に屬すべきものである。

第四類の「歌謠態」は近世の音響科學に即した純粹音樂で一定の歌曲と一定の發聲法に依つて「ことば」を表現するものである。佐久間博士は「話し聲」と「歌ひ聲」との異同に就いて、スツムプ(Stumpf)の説を引いて上の如く比較表を示してゐられる。(1)

この表に依れば「うた」は「はなし」よりも空氣の使用量、即ち聲量を多く要する事になつてゐる。この「はなし」は本

より第一類に屬する話述態の謂であらう。もし第二類の「演說態」に要するエネルギーを小聲の歌に比べたならば、「うた」に用ひるエネルギー必ずしも他の音聲表現法に優ると云ひ得ない事はいふ迄もない。

次に調子の範圍は「うた」の方が「はなし」よりも廣く、その發聲方法は「はなし」の方が「うた」よりも連續的である事も明かな兩者の特徴である。換言すると「うた」の方が「高低」及び「緩急」の調節に富んで居り、「はなし」の方がこの點に於て變化に乏しいのである。

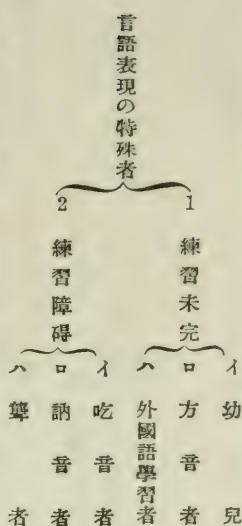
次の注目すべきは「はなし」に於ては母音が概して短かくて目立たず子音が明瞭で耳立つに對して、「うた」では母音が長く著しく耳立つが子音は却つて印象が弱い。これは「はなし言葉」が意味の識別上、調音的特質の著しい子音の發音を一層重要とし、「うた言葉」がリズムの移調上、旋律的餘音の多い母音を一層必要とする爲であらう。「はなし」と「うた」とが子音と母音に別々の重點を持つてゐる事も興味深い事である。

又「はなし」は言葉のもつ意味とアクセント型によつて表現要素(高低・强弱・緩急・休無休)を決定し、「うた」は音響學的及び藝術的の基調から表現要素が定められる。

しかし、これは本より概括的な特質であつて、「話述態」の内にも音樂的な語調を取入れる事も時には必要であり、朗讀に際してもリズミックな句切り方が美しさを增すこともある。殊に近來盛になつた口語體の韻文の朗讀には、一種のふし廻しさへ必要となるであらう。一方に於ては、「うた」の方にも作曲者の心掛として言葉のもつアクセントに重大な關心を拂はねばならず、言葉の意義を全然無視した唱歌法に生命のない事も云ふ迄もない。

言語表現の諸相は以上述べた樣に多種多樣であつて、その目的とする所が、或るものは、「知」の發表を主とし、或

るものは「情」の披瀝を主とし、又或るものは「意」の傳達を主としてゐようが、正常なる話し手の場合は何れも、前述の「話述の要件」を更に詳細なる研究題目として進む事になる。

B **特種の諸相** 玆に言ふ「特種」とは廣い意味での言語練習の未完成な者である。この原因には(1)年齢・環境その他の理由によつて練習の完成しない者、(2)生理上の缺陷その他の理由で練習の行ひ得ない者、(3)既に言語練習は終へたが何かの理由で現在障碍を受けてゐる者である。更にこれを一覽表にすると、

(1)の練習未完のものは發音器官の障碍ではなく、一言語又は一方言に對する初習の爲めの練習未完であるから、正しき指導法を得れば充分に習得或は矯正の實を擧げ得るものである。

〔イ〕 **幼兒** 幼兒は普通滿六歳で一千語を活用語彙 (active vocabulary) として獲得する事になつてゐる。滿二歳で二百語であるが語音から言ふと五十語位の内にわが國語に用ひる全*二十五種の語音は出盡す筈である。けれども、實際はその内の數種の音が滿三歳になつても時には滿五歳になつても完成されない。例へばハ行とか、ラ行とか、サ行とかはいつまでも六かしい。

※【備考】長母音、長子音、及び二重母音を省いた短母子音の廿五音を指す(本講8頁參照)。

【參考】筆者に一年一ヶ月の女兒がある。之は長男の同時期に比べると、言語發達が少し早いかとも思ふのであるが、次のやうになつてゐる。

生後一ヶ月の終りから二ヶ月の初めにかけて、母音〔ɑ、ə、i、i:、i:〕が出、間もなく、子音〔j〕及び熟音〔ja〕が出た。五、六、七ヶ月にかけて〔タ、タ〕〔バ、バ〕〔ブ、ブ〕〔チャ、チャ〕〔ヂュブ、ヂュブ〕〔ギャ〕〔マ〕が出た。九ヶ月目に〔マンマ〕を一語發し、二週間後に〔マンマ、マンマ〕を連發。十ヶ月目に「オッパイ」「アーチャン」を言ふやうになつた。十三ヶ月目には廿五語で、その語音は〔a、i、ɯ、e、o、p、b、m、t、d、n、k、ŋ、tʃ、dʒ、j、w〕の十七音である。それで未だ一度も出ない音は〔s、z、ʃ、ʒ、h、ts、dz、r〕の八音である。

語音が一通り習得されて、しやべる事が隨分富豐になつて來ても、尙、一定の語に該當する一定の正しい語音を使用する事は仲々完成されない。それがため、所謂、「嬰兒語」「幼兒語」「兒童語」などといふ言葉の特殊世界が保有されてゐる。本章では右を總稱して單に「幼兒語」と呼んでおく。この「幼兒語」の性質を考へると、A「幼兒のことば」とB「幼兒のおん」とに分ける事が出來る。Aは例へば、オッパイ(お乳)、ポンポ(腹)、アンヨ(足)、タンタ(足袋)、カンカ(髮)、バッチ(汚い)、トト(魚)、キーキ(病氣)、チィチ(蟲)、オブー(お湯)、パッパ(煙管)の如く幼兒特有のことばで大人は普通に用ひない語彙である。Bは大人が用ひる語彙を幼兒が用ひると、幼兒特有のおんに飜譯して仕舞ふものである。それで、應用音聲學の研究分野は前者よりも寧ろ後者にある。

「幼兒のおん」の傾向を大別すると、發音の一「容易な方面」と二「困難な方面」或は一「陷り易い方面」と二「不能の方

面」とになる。今その細別を表示して例を擧げると、

一【陥り易い方面】

| | | | |
|---|---|---|---|
| a 「チ」音化 | デンシャ——デンチャ | ウサギ——ウチャギ |
| | ハシ——ハチ | オカシ——オカチ |
| | オソバ——オチョバ | ミツマメ——ミチュマメ |
| b 「タ」音化 | センセイ——テンテー | ウサギ——ウタギ |
| | サクラ——タクラ | マクラ——タクラ |
| | オサル——オタル | サンジツ——タンジツ |
| c 「ン」音化 | オイモ——オンモ | |
| | ミミ——ミンミ | |
| d 無聲化 | グンカン——クンカン | バカ——パカ |
| | ガッコー——カッコー | ギューニュー——キューニュー |
| | ビスケット——ピスケット | |
| e 省略 | ダレ——ダァ | チクオンキ——オキン |
| | クツ——ク | ギューニュー——ニュー |
| | アリガト——アンガト | イタダキマス——イタキマス |
| | カーチャン——アーチャン | ステル——ウテル |

f　混　乱

アラ ―― アヤ　　アオヤマ ―― アヨヤマ
ハクボク ―― ハコボコ　　カエロー ―― カイヨウ
メガネ ―― ミガニ　　タマゴ ―― タガモ
アジノモト ―― アジモノト　　オリガミ ―― オリマギ
デンシンバシラ ―― デンデンバラシ　　デンワキョク ―― デンマコク

二【困難な方面】

a　〔h〕の困難

オヘソ ―― オペチョ　　ヒコーキ ―― チコーキ
ハト ―― アト　　ハナ ―― アナ
ハイ ―― アイ　　フミチャン ―― ウミチャン
ゴハン ―― ゴアン　　ホン ―― オン

b　〔r〕の困難

コレ ―― コエ　　リンゴ ―― ジンゴ
ブランコ ―― バンコ　　オクレ ―― オクエ
ラヂオ ―― ヤヂオ　　オカエリ ―― オカイイ
タラノコ ―― タダノコ　　ガール ―― ガーウ

c　〔z〕の困難

ゾー ―― ドー　　ミヅ ―― ミジュ
ドーゾ ―― ドージョ　　ドゾー ―― ドドー
ネズミ ―― ネジュミ　　ゾーキン ―― ドーキン

右の「陷り易い方面」のd・e・fも、その主要な原因は矢張り、困難な音「h・r・z・g」の何れかを含んでゐる事から起つてゐる場合が多い。それで、幼兒の音の練習及び矯正は、「チ・タ・ン」化、卽ち類化作用を成るべく避ける事と、「h・r・z・g」の練習を積ませる事にあると思ふ。

d 〔g〕の困難 （グンカン——ブンカン　ガッコー——カッコー
　　　　　　　 ガラス——アース）

〔ロ〕 **方音** 「方音」の著しいものは、その發音矯正を要する點に於て、矢張り特殊者の一つと見なければならぬ。最近は「方言」の研究が盛になつて來たが、これと伴つて行はれなければならぬものは「方音」である。何れの方言にも必ずその語に個有のアクセントと語音とがある。調査者が之を無視して、單に言葉だけを文字で採錄して來て、標準語で讀んで見ても、それは明かに片手落で、方言そのものの全的相姿は掴まれてない。

　これと同じ意味に於て、地方の人々が標準語を學ぶ時に、所謂お國の語音でお國の訛をつけて讀んで見ても、本當の語靈は乘り移つて來ない。又、標準語はその重大な使命である抽象性を缺いて地方的な、個人的な、卽ち具體性を帶びて來るから、切角の普及も未だ眞の使命を達成し得ない事になる。それで音聲敎育としては、どうしても地方的色彩の强い「音」から矯正して行かなければならぬ。「標準音と方音」に就いては第二章第二節に概說しておいたから玆には省くが、東北のズーズー辯、裏日本のfa fi音、岡山のæ音、出雲や福岡のʃe音など擧げれば限りなくある。東京で標準語を使ふといふ人々の中にも尙、標準音を發し得ない者が少くない。例へばイとエの取違へ、ヒとシの無區別、シュ音の無視等等。

〔八〕**外國語學習者** 外國語學習者が音聲學の知識に恩惠を蒙る事は甚だ大きい。しかし、これらの人々は直に外國語の奇異なる音聲の習得を急ぐよりも、先づ母國語の語音を心得る事が捷徑であり、且つ確實である。母國語の發音を充分に心得た後に外國語中の如何なる音が、又如何なる程度に異つてゐるかを比較して體得するのがよい。これを逆に行はんとする人々の中には國語の正音に對する認識を困難とするやうな事さへあるのは遺憾である。例へば歐洲語に耽溺した爲めに國語の「ラ」の子音を純然たる〔l〕又は〔r〕に發して自覺しなかつたり、「ス」に對して〔θ〕を當てたり、「チ」に對して〔ti〕を用ひたりするものが少くない。

| | 國語音に近似の英佛獨音 | 國語音に遠い英佛獨音 |
|---|---|---|
| 母音 | i e ə ʌ ɑ | ɛ æ ɔ u: ü ö y |
| | o u | y: ϕ ϕ: ɛ̃ œ œ̃ ɔ̃ |
| 子音 | p b m t d n | w ʍ f v θ ð |
| | k g ŋ j h | l r ʀ |
| | s z ʃ ʒ ç | g x ʔ |
| | (tʃ dʒ ts dz) | |

今、國語の音に比較的近いものと比較的遠いものとを、英佛獨に對照すると上表の如くである。

以上の三項は何れも、單に環境上練習が必要なのであるから、研究の主眼は正しき指導法と能率增進の點にあると思ふ。これに對して第二の練習障碍は廣い意味での發音器官障碍である。從つて、この練習には單なる口腔内の研究以前に廣く全身の健康や、精神狀態にも及ばなければならぬ。

〔イ〕**吃音** 吃音者の數に就いて東京市教育局學務課の調査[2](昭和八年)に依れば、全市三十五區五二〇校の男兒三四二、四二九名の中で吃音が三、六五四名、女兒三三一、三四七名の中で吃音が五四三名である。その率は男は一〇

○名に對し、女は六○○名に對して吃音者一名である。筆者が先年男子中等學校に就いて調べた所によると、輕重合せて約五○名に一名の割であつた。東京市の調査でも、初學年より上學年に至るにつれて吃音者の數が増してゐる。けれども中等學校では初學年に多くて上級ほど減少してゐる。これは吃音が言語習得期の二—三歳から始まつて思春期を過ぎる頃から次第に減少する傾向を示すものである。そして、女子よりも男子に多く、東京市の調査でも男八七に對して女一三である。吃音を先天的遺傳性と見る學者もあるが、今日では後天的に言語習得期の模倣性によると見る説が優勢である。

又、その原因を生理的缺陷に基づくと觀る説と、心理的缺陷に基づくと觀る説とがある。しかし、何れの説も絶對的に他を説服する所までは進んでない。從つて、その療法としても肉體的と精神的との兩方面から行ふ事が萬全である。グッツマン氏（Gutzmann）は呼吸練習に重きをおき、ハ音を發音せしめつゝ種々の音を練習させるのであつて、わが國では伊澤修二氏の方法はこれに似てゐる。リープマン氏（Liebmann）は呼吸練習を不用とし、音と音との間を引き延ばして、ゆつくり話させる方法を考案した。スティール(Steele)氏などもこれに似た方法を撰んで所謂「吃の歌上手」を利用してリズミックに發音する事を勸めてゐる。トレームナー（Trömner）などは催眠術又は精神分析法を主張してゐる。けれども、未だ音聲學者にして音聲學方面から、この矯正の原理を立てた者はない。吃音は八割までは治癒すると云はれてゐるが、而かも再發するものも少くない。治療期間に三週間位と稱してゐるが實際は二ケ月も三ケ月も要する。樂石社などでは「ハヘホ」練習を唯一の玉條としてゐるやうであるが、その効果には未だ疑はしいものが少くない。

今後はグッツマンのやうに實驗音聲學の力を借りて、機械實驗に訴へて研究さるべき點も多く、又わが國の貝田好[3]美博士のやうに言語心理の基本問題によるべき點も多い。又、教育上には[4]スクリプチャー氏のやうに音聲練習と性格教育とを兼ねた方法を研究する事も大切である。

〔ロ〕 訥　音　これは所謂「舌の廻らぬ人」と呼ばれるものである。幼兒が發すれば「片言」であるが、成人が用ひるのを習慣性訥音症といふ。その原因は聽覺から中樞に傳達せられる音聲感覺の發育不充分にある。その強度のものは男よりも女に多く、又體質的には左手利に多いと言はれてゐる。

訥音には、母音訥音症（Vokalstammeln）と言つて「ハヒフヘホ」の〔h〕を落して「アイウエオ」にするもの、又は逆に母音を一つ宛多く入れるものがある。それから子音訥音症（Konsonantstammeln）と言つて「ラ」を「ダ」又は「タ」と間違へ、「ロ」を「ド」とするもの「セ」を「シェ」とするもの、「パ」と「バ」と、「ダ」と「タ」とを混同する等のものがある。

例を擧げると、

ローソク――ドーソク　　レンタイ――デンタイ
ラッパ――ダッパ　　ロンドン――ドンドン
ヒバシ――シバシ　　ヒビヤ――シビヤ
ヒコーキ――シコーキ　　ヒヤク――シャク
バナナ――パナナ　　ビスケット――ピスケット
ベンチ――ペンチ

イッセン――イッシェン　センセイ――シェンシェー
サケ――シャケ　サビ――シャビ

その他「ハチ」を「カチ」、「マド」を「マト」などもあり、「エンピツ」を「エンペツ」、「ニンジン」を「ネンジン」といふのもある。又、語音を轉換するもの、例へば「チャガマ」を「チャマガ」、「コマゴメ」を「コマモメ」、「トダナ」を「トナダ」などといふのも一種の訥音である。

訥音の性質は、年齢に依つては前述の通り「かたこと」であるが、その社會の人々が多く共通して用ひる時は、「方言」となる。

語彙に依つて、その共通性の程度があつて、謂はば地方的方音、又は個人的方音として攻められる事になる。例へば、東京で日比谷を「シビヤ」と發音する事は、臘燭を「ドーソク」と呼ぶほどに笑はれては居ない。現に左團次にしても、八重子にしても檜舞臺で幾千の觀客を前にして、この音を公然と放つてゐる。「ナギナタ」も昔は「ナギガタナ」であり、「アタラシイ」も古くは「アラタシイ」であつた。

要は、訥音の矯正が、その年齢その社會にかかる事になる。矯正の方法に就ては、第一章の考慮が必要であらう。

〔八〕聾啞　言語教育の未完といふ點に於ては、小兒も聾啞も同じである。けれども、前者は耳に故障がないため聽覺に訴へる言語教育が行ひ得るに對し、後者は目に依つて言語の識別を視覺に訴へなければならぬ。

視覺に訴へる方法も、以前は聾啞者の間にだけ通用する「手眞似」であつたが、今日では「視話法」「讀唇法」、又は「口話法」と呼ぶものが用ひられるやうになつた。

口話法は古く十七世紀頃に瑞西の醫師アムマン（Ammann）が試み、その後幾多の人々によつて改良が加へられ一七七八年にはライプチヒに教育所が建てられて口話法(Lautier-methode)と呼ばれ、一名獨逸法として知られた。
一方、佛國に於てルエッペエ（Abbé Charles M. de l'Epée）の創設で「視話法」が生れて、佛獨で激しい論爭が行はれた。けれども我國では漸次「口話法」を採つて、(5)聾教育振興會なども出來て、益々盛に研究せられるやうになつた。
聾啞者の發音に於ける最も大なる缺點は呼吸調節の不完全である。聾者には先天的と後天的とあるが、後天的と雖も子宮内性、胎兒性が主で、言語教育完成後、外科的に聾者となつたものは極めて少ない。從つて通常聾啞と呼んでゐるものの大部分が他人の音を聽いた經驗がなく、發音に當つて調節が出來ないため呼氣吸氣を濫費する。又、喉頭の諸筋肉に充分な活動がない爲めに音聲が自然と羸痩で、時には「聲音衰弱症」になる事もある。
これを救ふためには、一般的體質改良の運動と、呼吸運動、特に母音の基本練習を「强弱」「高低」「緩急」等種々に組み合はせて毎日規則正しく行ふ事が必要であらう。
單語に就いて言へば、右の缺陷に關聯して、「ハ行」音が第一に困難である。次で「カ行」、「サ行」などが六かしい。又、顎角の狹いイ列・ウ列は相互的に判別も表現も不充分である。けれども、注目すべきは、正常人が判別に苦しむ音が必ずしも聾啞に困難な音ではなく、反對に正常者に容易な音が必ずしも聾啞に判別し易い音でないと言ふ事である。謂ひ換へると、聽覺に訴へるのと、視覺に訴へるのとは、音の特質に就いて觀點が異なるといふ事である。
「イ行」と「ウ行」とが紛らはしいのも、國語の音構成法が、口腔内で舌位置を異にしてゐても外部へ、即ち脣の形狀に及ぼす所が少いからである。然るに「ア」と「オ」などは視覺に訴へる脣の形狀は明瞭に違つてゐるから聾啞には判然

としてゐるのに、正常人にとつては舌位置の變化が不充分になり勝ちの所から聽覺的には屢々間違を起すのである。

〔備考〕 醫博寺澤巖夫氏は、無意義の音を並べたものを電話によつて發音して、十數名の交換手に聽取させ、母音各音の聽き違へ關係を次の如く、回數と比率とで示された。

| 聽き違ひ | 平均回數 | 平均の逆數 | 聽き違ひ | 平均回數 | 平均の逆數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 「ア」が「イ」 | 四・五 | 二二 | 「イ」が「エ」 | 三一・〇 | 三 |
| 「ア」が「ウ」 | 一五・〇 | 六 | 「イ」が「オ」 | 六・〇 | 一七 |
| 「ア」が「エ」 | 三・五 | 二八 | 「ウ」が「エ」 | 一二・〇 | 八 |
| 「ア」が「オ」 | 一〇八・〇 | 一 | 「ウ」が「オ」 | 七・〇 | 四 |
| 「イ」が「ウ」 | 一八・〇 | 五 | 「エ」が「オ」 | 一八・〇 | 五 |

即ち「ア」「オ」の間違ひが第一位で「イ」「エ」が第二位、「イ」「ウ」、「エ」オ」が第三位を占めてゐる。

東京市立聾學校の石黒晗氏の談[6]によれば、聾兒がトーキー又は芝居を見て、その話を解し取る難易は次の俳優順であつたといふ。

最もよく分る（田中絹代）　次でよく分る（及川道子）　その次に分る（川崎弘子）

分らない（栗島澄子・市川羽左衛門）

石黒氏自らの聾兒に接する談話の表情は極めて自然的である。少しも誇張なく、又、特に聽かせようとする無理がない。俳優の口付きも、以上の點に自然性を缺く事が原因ではなからうか。

次に聾唖の發音教育に大切な事は、「音調」の問題である。音の「強弱」、「高低」の見分に困難を感ずる聾唖に取つては、「言葉」が有する「音調」による意味のニュアンスを理解する事が出來ない。從つて、この模倣表現も達成されない。(1)大池菅根氏は、「間の指導」に於て、例を掲げて、

「タレカイマスカ」と「ダレガイマスカ」　「何ヵホシイデスカ」と「何ガホシイデスカ」

の區別が仲々六かしいが大切であると指摘してゐる。これなどは明かに「音調」の問題である。又、同氏は「視覺の訓練」に於て、

1　側面からする讀話練習　　2　口形を隱くしてする讀話練習

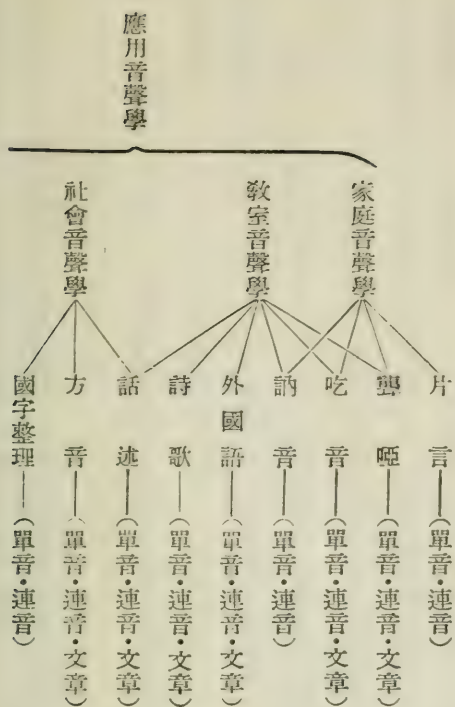
を擧げてゐる。これらは實際、今日の聾教育に於て實行されつつある所で、聾兒の注意深い觀察と敏捷精確な判斷にたゞ〳〵感激を與へられる所である。けれども、尙正常者に劣る前述の如き諸點を完成する爲めには、諸語音及び連音、又は文章が單に唇や頰だけでなく、全表情及び咽喉部に表はれる特質を實驗研究して分析綜合し、一つの「パターン」として實際教育界に提供されなくてはならぬと思ふ。又、一方に於て聾教育に當る教師は少くとも、自らの耳を覆ふて聾者の訓練を積み、聾唖の口話を讀み得る域にまで達しなければならぬと思ふ。此處まで突入してこそ、應用音聲學は眞に確立されるのであつて、眞の各論研究はこれから湧き出て來るのである。

「言語表現の特殊者」としては今一つ、且て習得した正常者で目下、何かの原因で中斷してゐるために、再練習をせしめる必要あるものがある。例へば「三ッ口の手術者」「齒を失つた人」「聲帶手術者」、その他一般の「發音障碍」又は「失語症」を治療したもの、等である。發音障碍の中で、中咽部及び下咽部に腫瘍の發生、又は炎性腫脹が出來る時は

音聲は恰も團子を口中に含めた如き狀態になる。又、鼻腔に腫瘍・炎症・腺性增殖等に依つて閉塞が出來た時は、著しい鼻聲となる、又、軟口蓋の腫瘍等により口蓋に破裂又は穿孔を生じ鼻腔と口腔とが通ずる時は、その言語は殆ど理解されない。

勿論かかる種類のものは、極めて例の少い特殊者であらうが、而かも尙、「特殊者」としての音練習の不要の筈はない。これらを綜合して醫科學への應用音聲學、又は耳鼻咽喉科應用音聲學とも呼ばんか、その研究も仲々忽には出來ない。最後に應用音聲學の研究分野を一覽に收めて筆を擱かう。

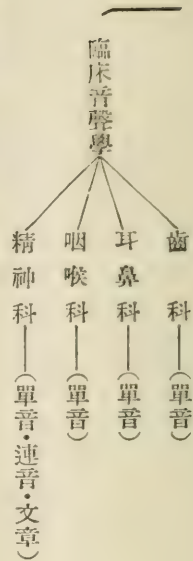
臨床音聲學
- 齒科――（單音）
- 耳鼻科――（單音）
- 咽喉科――（單音）
- 精神科――（單音・連音・文章）

註

1 同著「一般音聲學」（二一〇頁）

2 東京市教育局學務課學校衛生掛の調査報告書（謄寫板刷り）（昭和八年）

3 博士のは吃音の原因を構想及び音象徴の障碍と見てゐる。「……表現内容を持つやうに單語を並べる課程をプロポジションと謂ふ。このプロポジションによつて出來たものは内的言語である。この内的言語が外的言語となつて聲帶を通るには音的に象徴化されればならぬ。……吃者に構成される内的言語はその内容まで變性を生じない。文法的にも内意的にも變化はないがプロポジションてふ心理過程の量的、換言すれば時間的の障害である。このために意慾に可能がよく近隨し得ず、つひ吃なる症狀を現はす。從つてプロポジションに充分の時間的餘裕をあたふれば、卽ちゆつくり話しさへすれば吃の症狀は著しく輕快するか、全く消散する。」――現代醫學大辭典・耳鼻咽喉科篇（二八〇頁）「吃」。

4 E. W. Scripture : Stuttering and Lisping. 第四章「治療」、五六―七三頁）「何故あなたはお吃りになるんです」「わたしは吃る吃ると心配ばかりするからでせう」と言ふ對話が揭げてあるやうにS氏は個人としても、家庭に於ても、學校に於ても、「吃りではない」と言ふ信念の修養と敎育を主張してゐる。

5 且て聾口話普及會と稱してゐたが、今では財團法人聾敎育振興會となつて、德川義親侯を會長とし、事務所を文部省内

に置いてゐる。その機關雜誌「聾口話教育」には全國の實際家から有益な寄稿が載つてゐるが、音聲學方面に科學的研究が皆無である。

6　音聲學協會例會第二十九回、及び同會報第三十一號所載。

7　聾教育叢書・第二輯、「讀話練習に就て」(九頁)。

昭和九年三月五日印刷
昭和九年三月十日發行

國語科學講座
（第七回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院

# 目次（應用音聲學訂正目次）



**追記**　本文中三七頁「第三章　單語篇」の五字は二八頁「アクセントの二型」の前の行に入る。